いつか神司の殺戮者

燐

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
いつか神司の殺戮者

【Ｎコード】
Ｎ４７００Ｐ

【作者名】
燐

【あらすじ】
君は何かも無くなった無くした……酷いな、酷いよ……けど許すよ？
君がそれを望むことは多分僕は理解できたと思うだから君の中に打ち込んでおく……どんなもの君に有害な物が襲われないように大丈夫……君はどんな敵でも■せる。
例え君の敵が、神であろうとも、悪魔であろうとも、天使であろうとも、……心配症の俺が掛けておく。
魔法《呪い》……もう心配しなくていい……ただ……ただ……君は

“幸せになればいい”。

いつか天魔の黒ウサギの二次創作です主人公最強です。
更にこの小説にはかなりのご都合主義が練り込まれています。
不快感を抱く人は即刻“戻る”を押すことをお勧めします。
※元『いつか天魔の殺戮者』

プロローグ（前書き）

燐

「どうも作者の燐といいと言います。
この度は私の作品“いつか天魔の殺戮者”を開いてくださって誠にありがとうございます。
また……違う作品かとやる気あるのかこの作者と思いますがどうしても自己満ですがこの小説をやってみたいと堕ちた文才ですがやってみたいと思い書かせていただいて頂きます。」

燐

「最後にこの小説は主人公最強、ご都合主義かなり多めに含まれていて嫌な感じを抱いてしまうかも知れませんがそんな時は戻るを押していただきたいと思います」

では、記憶喪失な少年が何かを探す学園リバース・ファンタジー始まります。

プロローグ

あぁ……まただ、また、可笑しな夢を見る。

その夢は悲しくて、苦しくて、辛くて、泣き叫んでも、もう何もかもが存在しない……自ら“紛い物”と呼んだ人の記憶

けど……誰かが手を差し出した。
それは、この世には存在しないだろうと思うぐらいの人が立っていた。
その人はとても……“言葉”と言うちんけなことでは説明できないほど美しかった。

光を吸収しそうな輝きを放つ金色の髪。

雪のような真っ白の穢れなき肌

パッチリとそのどんな光も反射してしまうような銀色の目を開き

何故、こんな夢を見ているのかは少なくても分からない……只分からない……何故、自分が?、と頭にそんな言葉が痛いと思うほど回る回る……

けど……たった一つだけ分かることがあるそれはこの人は……この人達は何かに結ばれていたんだろう。

何故か胸が痛い、泣いてしまうほど、泣き叫んで、救いを求めているかのように手を上げた。
掴むようにその何もかもが分からない…夢、蜃気楼を掴むように俺はその手を……

ーーーその手は何に使う？

そんな言葉が身体中に紫電の如く俺の体に滑り込んだ。
その人は何を言っただろうか？

確かに、聞こえたけどその言葉を……声として音として分からない……確かに“聞こえた”けどそんな言葉は体が拒絶しているみたいに聞こえない。
それと同じく体も石のように動かなくなった。

見ている夢がドンドン光で包まれる。
そして、思う

ーーーあぁ、これで終わりかと

何度もこの夢を見るけど最初は何も見なかった。
徐々にまた徐々に少しずつパズルを組み立てるように続きまた続き

へと進んでいく。
また、見るときはあの後

どんなるんだろうかとか
どんなことをするんだろうかと
どんな最後になるかだろうかと

もう少し、もう少しと続きを見たかったなと残念な思いをして
またいつ見られるのかな？
続きはどんなことが起きるのかなとアニメの次回予告を見るように
俺はゆっくり瞼を開けた……

ーーーこれがこの鉄家（くろがね）に居候している記憶喪失の少年……鉄昭（くろがねあきら）の
夢だった

プロローグ（後書き）

燐

「遂に始まてしまいました

もう後戻りは出来ないかと頭を悩み作者の燐です。

……なかなか後書きのネタが思い付きませんね……なのでこれだけは！

と、思うことを書きます。

自分はとても心が弱いく脆いのでちょっとした辛口コメントでも直ぐ心が折れてしまいます。

何分、堕ちた文才なので不快感を抱く人は多いといますがそこはなにとぞ大きな心で見てくれると大変嬉しいです」

第一章：始まり（前書き）

燐

「書き終わりましたので投稿します。駄文ですがよければ見てください」

第一章：始まり

いつもの朝だ……とは言ってもまだうっすらと太陽が顔を見せているだけでまだ外には人の影はあまり無かった。

昭

「ん……」

ゆっくり背を伸ばし体を起こす。
そして俺は動きやすい服装に着替える。

今から一年前くらいだっただろうかこの鉄家に来て……
突然だが俺には記憶が無い。
一年前くらいまでの記憶が一切無い。
俺はこの家の近くで倒れていた……らしいが
何も覚えていない。

……偶然、学校帰りでだったこの家の長男、鉄（くろがね）　大兎（たいと）さんに発見されたらしい。

聞くにはかなり俺はかなり衰弱していて意識すら無かったらしい。
それから病院に緊急搬送され体を診察したが衰弱しているだけで体には傷一つなかった。

名前さえも覚えていないので身元も確認できない。

おまけに俺の容姿は

雪のような白銀色の髪

空のような蒼い目

顔はどこか日本人に似ていたがあまりありえない容姿に誰もが気持ちわるがった。

通常ならば孤児院に行かなければ無かった。

けど……鉄家は俺を受け入れてくれた……何もない俺に

そうして俺は鉄（くろがねあきら）昭とゆう名前を貰った。

今は大兎さんと一緒の宮坂高校に通っている。

大兎さんの幼馴染みでお隣さんの時雨（しぐれ）遥（はるか）ちゃんと一緒に楽しい高校生活を満喫している。

そして俺は毎朝、新聞配達のバイトを営んでいる。

仮にも俺は養子だがいつもお世話になるわけにもいかずこの家の大黒柱である鉄（くろがね）大牙（たいが）さんに許可を貰いバイトをしている。

最初は反対されていたが何度か説得していくと徐々に諦めていきやっと許可を貰った

昭

「……行ってきます」

色々と過去の思い出を思い出していくとあぁ……自分は“幸せだな”と熟思えてる。

何時もの近所の家を周り新聞配達し近所の叔母さんや叔父さんに挨拶をして俺は幸せをくれた鉄家に帰ることにした。

昭

「大兎さん。起きてください。もうホームルームは、とっくに終わりましたよ？」

遥

「そうだよ！。そろそろ起きてよ大兎。昭が困っているよ？」

あれから特に今日も何も何時ものように学校に登校したが……今日は大兎さんがお寝坊さんのようだ五時間目からずっと寝ていた

大兎
「う〜〜ん？」

大兎さんは小さく呻いて薄く目を開く

大兎
「……どした？」

……どうやら、大兎さんはどのくらいから寝ていたかすらよく覚えてないらしい。
証拠に今その事を遥ちゃんに指摘されている

大兎
「……あ〜、え〜、そのぉ、俺、机下げたほうがいいよね？」

今は教室の掃除中、机を後ろに下げずにだらだらと眠り続けていた大兎さんを、ひどく迷惑そうな顔をしているのに気づいたみたいだ。

昭
「それじゃ、遥ちゃん僕は掃除がありますので……」

遥

「うん！。掃除頑張ってね」

今日は掃除当番なので僕は女子たちに箒を渡し机を下げ始めた……
女性に重たい仕事を任せるのは男として悪いと思う。

とは……言っても、もう殆ど終わっていて後は大兎さんの近くを掃除すれば終わりなんだけどね。

いつもいつもで幸せな日々が続いていくといいなとよく思うけど何だろう？
何故か自分の心はそう思うように暗示を掛けられているようだとたまに……そう感じてしまう……ほど何かがあると思ってしまう。

「もう掃除が殆ど終わったから帰っていいわよ？　昭君」

昭
「えっ？…でも……」

知り合いの女子がもう仕事はいいと言ってくる。
バイトは四時三十分からだ
今の時刻は三時四十分……余裕はそれにあるが

昭
「いいの？」

「いいわよ。但し……！」

時間は進むが戻すことは無い
それなりには余裕があるが少しゆっくりしていると直ぐに時間が来る。
けど……何だろう？
あしかに早く帰れるのは嬉しいけど目の前の女子は何かゴニョゴニョ言っている

「……自信を持つのよ……！、桜……このために……ブツブツ……」

確か彼女は鳴風　桜さん

桜のようなピンク色の髪
に
少し吊り気味のオレンジ色の目

教室の中でもかなり可愛い類に入るらしい

桜
「鉄　昭君！。今週の休日、空いてない！？」

昭
「あっ…うん。空いていると思うけど？」

桜
「そう……えっと…その今度私と一緒に出掛けない？
美味しいお店見つけたから」

昭
「……僕で、よければ」

とくに断る理由も無いし丁度その日は暇だったはず……けど一緒に出掛けるだけでなんでそんなに顔が赤いんだろう？

桜
「やっ、やった、えっと…その……連絡用にメールアドレスを交換しない？」

昭
「いいよ。赤外線通信でいいよね？」

桜
「うっ、うん！」

それからお互いメールアドレスを赤外線通信したが桜さんは終始、顔が赤いどうしたんだろうか？
風邪かな？

昭
「それじゃ、桜さん。みんなお先にさようなら、大兎さんも遥ちゃんも」

教科書などを詰め込んだバックを持ち教室を出ようとすると皆口々に「さようなら～～」、とか「バイバイ～～」、とか言い返してくれる。
そして僕は少し早走りで教室を出た。

そして今日が自分の幸せと思っていた日常が崩れていくと真の物語は今日から始まると僕はこの時、思いもしなかった。

第一章：始まり（後書き）

燐

「難しいですね～～。頑張って書いているつもりですが中々思い通り書けない……しかし、頑張っていきたいと思います。誤字、脱字等がありましたら感想で送っていただくとありがたいです」

第二章：壊れる日常（前書き）

燐

「どうも作者の燐です更新に遅くなってすいません相変わらずの駄文ですがよろしければ見てください」

第二章：壊れる日常

いつもの日常……みんなが毎日平和でいられたらな……と。
世界の中でここだけが幸せでも……僕は……ここで只何もしないまま生きるしかない……それが……僕のーーーーなのだから

昭
「よし……ここで終わりと…」

いつものバイトの新聞配達で最後の一部を郵便受けに入れた……今日はこれで終わり

昭
「このまま……帰ろうか…」

バイトの上司にメールで『配達は終わりました。お疲れさまです』と打ち上司の携帯に送信した。

昭
「よし……」

その場で靴紐を結び直し僕は走り出した……が

???

「昭ちゃん！」

突然の自分の名前を呼ばれ振り向いてみると

昭

「碧水（あおみ）　華鈴（かりん）さん？　どうしたんですか？」

僕の目の前に居たのは碧水（あおみ）　華鈴（かりん）さん日本人らしい黒髪に茶色の瞳をしていて出ているところは出ていて出てないところは出でないグラビアアイドルのような美人さん……しかし今は酷く何かに怯え逃げてきたように呼吸が荒く何か尋常じゃない感じた

華鈴

「昭ちゃん！　首なしの化け物が！！！」

昭

「……はい？」

昭
「あ〜〜、なるほど……そんなことが」

華鈴
「そうよ！　貴方も早く逃げなさい！」

と……言い残し華鈴さんはどこかに走り去っていった。
華鈴さんの話によると……少女が居眠りトラックに跳ねられそうになったがそこに少年がその少女を押して身代わりになったらしい。
そこまでは理解できるが問題はそこからだ、華鈴さんの話によるとその少年は車に跳ねられた影響で首がもげた……人間ならばそれは致命傷……助からないまず首がもげただけで普通は即死だ……しかし、なんとあり得ないことにその少年は生きていたしかも喋ったそうだ体と首が離ればなれになっている状態で……

昭
「……ありえないか……」

ーーーありえないことなんてありえない……そんな常識こそ“あり

えない”よ……

昭
「っ……！」

頭の中に声が響いた誰の声なのか……分からない。
けど……この声は僕は“知っている”

昭
「……行こう！。何か分かるかもしれない」

僕の記憶は無い。
だからこそ知り合い僕の過去を僕は何をしていて生きていただろうかとか僕に本当の家族はいるのかとか……知りたい……僕は、自分が知りたい

昭
「……！」

ドンッ！と同じ瞬間僕の目線は一瞬にして二階建ての家を通り越えた。
僕の秘密は“人間”ではありえない身体能力、走るときも本気で走れば世界記録を簡単に塗り替えれるぐらいのスピードでフルマラソンを走っても殆ど疲れない。

そう……僕は普通ではない何かだ
しかも、もう一つ秘密がある……それは僕が“不死”であることどんなに傷を付けようが僕は死なない切っ掛けはとても単純だった僕は一度心臓を刺された……新聞配達で何時もの仕事をこなし帰ろうとしたとき後ろから刺された確実に刃は心臓を貫いた“死”を感じた……けど僕は死ななかった。
この事は誰も知らない知ってほしくない……僕自身もこの身体能力と不死を感じて思ってしまった

あぁ……僕は“人間”じゃないと

昭
「ここが……」

僕の目の前には華鈴さんが言っていた車の轢き逃げ？の現場だった。
既に警察がその場で地面にベッチャリと付いた血痕を調べていた。

昭
「血痕を見る限り……即死間違いなし
生きていたとしても出血多量で死んでる」

……何故こんなことが分かるかは僕も知らない何せ記憶が無い
からだ

昭
「血痕を探して追ってみよう……！」

生きているとしたらその少年は不死かそれか不死に近い存在だろう
日常から離れた存在……世界の裏の人間…僕について何か知ってい
るのかも……。
そしてあまりその場にいるのは不味いのでその場から離れる。

因みに僕がいた場所は近くのビルの頂上だ勿論登ったんじゃなくて跳んだ。

彼は只自分の記憶を探すために動くそれは操り人形のように彼は記憶を取り戻してこそ自分が本当の意味で完成すると思っているから

人形が人間になれるのかそれは……誰にも分からない

それでも、彼は。

第三章：闇の中の幻影（前書き）

燐

「どうもすいません。

遅くなりましたが更新しました。

まだまだ戦闘までいきませんが頑張って行きたいと思います」

第三章：闇の中の幻影

昭
「よっと……」

時刻はもう八時を越えた時間だろうか
一般的な家庭ならば晩御飯やお風呂、人によっては既に寝ていているであろう時、一人の少年が走っていた。
しかし、彼は道を走っているのではなく家の屋根を走り飛び越していた。
普通の人ならばまず真似出来ないことだが
そう……“普通”の人ならば

昭
「こっちかな……？」

可笑しいな……？
血が出ながら走り去っていったならば少なくても体には血が付いているはず、だとしたら地面に血が落ちてそれが印になるからそれを追っていったら追いつけると思ったんだけどな……

昭
「途中で服でも変えた？
……う～～ん
何か分かるようなしたんだけどな……」

流石にバイトがあるとしても少し家に帰るのが遅すぎだ。
皆に迷惑をかけたくないし……仕方がない、帰ろうか……？

と、少し失意の気持ちに凹み帰ろうとしたときふと……公園が目に入った。

昭
「……あの人は…？」

後ろ姿でよく分からないが服装を見るに自分が通っている宮坂高校の制服
更に奥にいる人物に目を凝らしてみると……

昭
「紅会長？」

漆黒の髪に、詰め襟の学生服を規律正しく首まで絞めている。
同年代とは思えない宮坂高校の生徒会長紅月光（くれないげっこう）だった

昭
「……紅会長！」

もしかして、車に跳ねられた人は紅会長？
いや、この人は何だかそんなことじゃ死なないと思う……
とか、自分でも思考が思い付かなくとりあえず紅に近づいて呼んでみた

大兎
「昭！？　何でこんなところに！？」

昭
「えっ！？　大兎さん！？」

えっ！？　何で？
こんな所に大兎さんがいるんですか？

大兎
「いや……その……」

……少し冷静に状況確認をしようとするとふとバチバチと火花が散るような音がした。
その音は大兎さんの腕の中で聞こえた。
腕の中……？
大兎さんの腕の中には電気が散らばっているような髪に百四十センチ位の少女を捕まえていた。
しかも大兎さんの足元の近くには黒いレイピアの用な武器が落ちていた

昭
「……えーーーと……大兎さん説明お願いします？」

大兎
「説明は後だ！
昭お前も手伝え！」

昭
「……」

月光
「お前は……鉄　昭か」

昭
「あっ……はい、そうです。はじめまして紅会長……？」

いきなり呼ばれたのでとりあえず挨拶をしておく全く状況判断が出来ないが相手は同い年でも生徒会長……大兎さんは［お前何言ってんだ］みたいな顔をしている

月光
「ふっ……他の奴よりは礼儀がなっているな」

えっ？　誉められた？
が……

？？？

「いきなり別の奴が来ちゃったけど、あたしいま、すごおおぉぉい機嫌がいいから、ちょっとだけ本気出しちゃおうかな～」

と、雷を纏った少女が手を上げた。そして首を押さえていた大兎さんの腕を掴んだ

？？？

「うそ？　あっさり術、解かれちゃった……何者なの、この子……」

薄桃色（ラベンダー）の長い髪に、真っ白い肌。吊り気味の真紅の瞳の美しい少女が少し驚いたように言った

？？？

「化け物だぞ～、がおー！」

雷を纏った少女は自分より身長も体重も多い大兎さんを片手一方で振り回した

昭
「ちょ、ちょ……」

流石に止めようとしたが先に少女は大兎さんは二階建ての家の二倍ぐらいの位置まで飛ばされてしまった

月光
「よくやった」

更に紅会長は大兎さんの足下にあった剣を拾い。そのまま薄桃色の方に剣先を向け突進していった

大兎
「ヒメア！」

大兎さんが薄桃色の少女の名前を呼ぶと彼女は今現在宙を舞っている大兎さんの方に跳び上がった

月光
「ちっ……おい、鉄　昭」

昭

「……あ、あぁ、はい！」

何もかもが突然で何もかもが分からない状況で紅会長に呼ばれかなり狼狽しながら答える

月光

「お前がここにいると邪魔だ……さっさと消えろ」

昭

「そっ、それは……」

月光

「さもなければ……殺すぞ？」

何も感じられない。ただ怒りや、なにかしらの感情が込められた声でもなかった。ただ……僕はこの時……怖かった

恐怖が体を包む体が叫ぶ逃げろと身体中の血が頭に上がりただ一つの命令を下そうとしている“逃げろ”と自分の目の前にいる人物は格上の存在と感じられた。

恐い……恐い

恐い

昭「ーーーーーっ！」

後のことはよく覚えてない。

気付けば自分の部屋にいた只、自分の体が数倍重く感じる程の疲労感を感じていた。

…………涙が頬を通る。逃げたのだ僕は自分の命欲しさに自分の大切な家族が傷つけられているのを目に見て……只……僕は…………！！！

昭「ううぅ……ああぁぁ……ぁぁああ」

何て自分は無力だと何て自分は馬鹿何だろう罪悪感と絶望感が思考を飲み込み……最後に昭はゆっくりと目を閉じた

白い空間
黒い空間
白と黒だけの世界
それはまるで……
光と闇、陰と陽、希望と絶望、生者と死者、正義と不義、太陽と月等の正に決して交わることのない世界……その中で只二人居た白と黒、両方の空間に居た

白い空間には正に天使と言っても過言ではない美しい人
黒い空間には正に悪魔と言っても過言ではない恐ろしい人

ーーーどう？

白い空間の人は黒い空間に向かって話しかける

ーーーさぁな……

黒い空間の人は冷たく言い返す

ーーーまぁ、少なくてもお前の掛けた魔法《呪い》は正常だ

黒い空間の人はただ淡々と冷たく喋る

ーーーうんそうだろうね。……何時まで持ちそう？

白い空間の人はもう一度黒い空間の人に質問する

ーーー早くて一年、もって三年……って所か

ーーー……短い

白い空間の人は顔に手を置き。深くため息を吐いた

ーーー当たり前だてめえに“アレ”を止めることは不可能だ

ーーーそう……

ーーーさっさと決めろ……彼奴の魔法《呪い》は俺まで影響を受けるようなったその時……

ーーーうん。分かっている。うん。分かっていたい

ーーーふん。精々悩みな……世界を守る“神様”よ

黒い空間の人は更に黒い空間の中に入っていき直ぐにその姿を無くした

ーーーねぇ？　僕はどうすればいい？……ーーーー

白い空間の人の声は只悲しいく白い空間と黒い空間の中に響いていった……。

第四章：物語の始動（前書き）

燐

「大変遅くなってしまってすいません作者の燐です
あれからあれは違うこれは違うと考えた結果相変わらず駄文ですが
とりあえず出来たので投稿します。
良ければ見てください。
感想なの良ければ書いていただくと大変嬉しいです」

第四章：物語の始動

……見えない

何も見えない

何もかもが真っ暗にそまり何も聞こえない、匂わない、感じない、見えない

只自分はその場にいるだけ

立っているのかも、座っているのかも、横になっているのかも、分からない

何故、自分がこの場に存在しているのかも……

でも……これだけは理解できる気がする。

この悲しさは
この憎悪は
この憤怒は
この苦しさは
この孤独感は

全て……“闇”なんだと

▽

昭

「……おはよう。遥ちゃん」

遥

「おはよう。昭君」

あれから泣き寝入りしてしまい何時もの用に学校に登校した。
大兎さんは帰ってきたのだが朝帰りなのか直ぐに寝てしまった。
……まだ、自分は大兎さんを見捨ててしまった事に罪悪感を感じている。
実際、今自分の思考の大半はどんな顔で彼に会えばいいのかとそんなことだらけだった

遥
「大兎は？」

昭
「うん……何か合ったらしくて朝に帰って来てそのまま熟睡中……」

遥
「えっ！？。そうなの？」

昭
「うん……起こそうとしたんだけど全然起きなくて……優香里（ゆかり）さんに先に行ってらっしゃい……て」

鉄（くろがね）　優香里（ゆかり）さん
鉄　大牙の奥さんで少しおっとりしている時があるが頼りになる女性だ

遥
「そうなんだ～。私が朝、迎えに行っておけば良かったな～」

昭
「あれは……中々手強いよ

脇をこそばしても無反応だったもん」

中々思い通り起きなかったので脇をこちょこちょとこそばしたが全くの無反応……多分よっぽどあの“後”疲れたんだろうね……

……

昭

「……」

遥

「ん？。昭君どうしたの？」

昭

「……何でもないよ遥ちゃん」

……あの後、どうなったんだろう

紅会長と和解出来たんだろうか……そもそも何でお互い戦っていたんだろうか……何もかも分からないまま……逃げたんだよね……

僕は

少し自己嫌悪しているとふとホームルームの開始を意味するチャイムが耳に聞こえる

遥
「あっ……もうこんな時間なんだ」

じゃあ、また後でねと遥ちゃんは自分の席に座った。
僕も自分の席に座りた所に担任の先生の狩野(かりや)先生が入ってきた

狩野
「皆、おはよう〜
早速だが出席を取るぞ〜」

と、狩野先生は欠席調べの為、クラスの人を一人一人呼んでいく……

狩野
「鉄は欠席っと……昭、大兎はどうした?」

少し睡魔に身を寄せていると呼ばれたので僕は答えた

昭
「大兎さんは……寝坊です」

狩野
「はぁ〜〜……そうかありがと」

大きく溜め息をつきながら狩野先生は欠席簿を閉じて皆と顔を合わした

狩野
「……はぁ」

皆と顔を合わした瞬間、狩野先生はふと教室の後ろの扉の小窓で何かを見て
何だか呆れたような溜め息をついた
そして、入れてと意味をするように指で合図をした

昭
「？」

教室の後ろの扉に誰か居るのだろうかとふと後ろを見てみるとそこには大兎さんが何やら凄く疲れたように教室に入ってきた

それから遥ちゃんが大兎さんに対して何時もの優しそうな顔をして大兎さんに話しかけている。

狩野
「お～い、鉄、時雨……おまえらカップルが仲いいのは結構だがま今はホームルームだから俺の話をきいてくれるか～？」

なんて狩野先生が言って
それに周りの生徒たちが一斉に笑う。
それに遥ちゃんが顔を赤らめて、でも、少し嬉しそうな顔をした

狩野
「え～……話の続きだが今から紹介する彼女は、先日クーデターが起きて失くなってしまったヨーロッパの小国、ピレーネ皇国という国の王族の血を引いている。父親は日本人だから日本語は喋れるらしいが、向こうで育ったために、まだこちらの常識がまるでわからないそうだ。そのために、いま、みんなにこうして話している。彼女はきっとこの、見知らぬ土地でひどく戸惑っていることだろう。だから仲良くしてやってくれ」

と、長く説明をしたが大兎さんはよく分かっていないそうで狩野先生は困ったような顔で呟いた

狩野
「だから話を聞いてくれって言ってるのに。また俺に初めから話をさせる気か？」

そして遥ちゃんが大兎さんに転校生が来ることを告げて席についた

昭

「……沙糸ヒメア」

僕は狩野が書いた今から教室に入ってくるだろう謎の転校生（ハーフの美人らしい）の名前を見ていた

そしてバンっという音ともに突然、勢い良く扉が開いた。
そして教室に、一人の女の子が入ってきた。
赤のプリーツスカートにセーラー服、という、そこそこの見た目の女の子でもかわいく見えてしまうような近所の学生たちにも評判のいい宮坂高校の制服が、あまり似合っていない少女
日本人ではありえない、……とゆうよりも普通の人間にはありえない、薄桃色の長い髪。毛穴一つない真っ白な肌。つんと高い鼻に、艶のある、綺麗なピンク色の唇そして兎のような赤い、紅い、真紅の瞳。
その美しさに制服があきらかに見劣りしてしまっているほどに、美しい少女が、そこにはいた

「う、うわぁ～、なんだあれ」
「び、美人」
「人間か？」

同じクラスの人たちが口々に言う

そして、狩野先生が転校生……沙糸（サイト）ヒメアを紹介しようとすると大兎さんを見た瞬間彼女は叫んだ。

そしてそこからあり得ない目を疑ってしまうようなことを目撃した。
彼女は“飛んだ”。
一番前の席を踏み台にしてぽんっと飛ぶ。
次に真ん中席の、斎藤さんの机を蹴って、さらに飛ぶ
正に“飛んだ”だのだ僕はそれに只々、見惚れていた。

大兎
「あ、えーと、ち、違うんだ遥……これは、ええと、ちょっと待った！！ひ、ヒメア！？」

ヒメア
「もう離れない！二度と離れないって言った！」

等と白昼堂々と恋愛ドラマの告白シーンを見ているような気分がした……いや、そんな気がした

しかしその後、なんと安藤美雷ちゃんが乱入？遥ちゃんは涙目で大兎さんに問い詰め恋愛ドラマというより寧ろ修羅場？昼ドラ？みたいな気がしたのは間違いではないだろう

そこに、一人の男性が入ってきた。
漆黒の髪に、詰め襟の制服を着た、冷たい瞳の……宮坂高校の生徒会長“紅　月光”が立っていた

月光
「いや先生。そいつは俺がもらっていく。今日から生徒会で奴隷のように働いてもらうことにしたからな、そいつにはもう、校則は適用されない」

それに狩野先生は驚いた顔で、教室の入り口を見る。
そこに立っているの紅　月光……宮坂高校の全てを握っていると言っても過言ではない人物なのだから

狩野
「あ、紅君の仲間なのかい？」

月光
「違う。奴隷だ」

狩野
「じゃあ安心だ」

大兎
「ってなんでだよ！」

端から見るとまるで漫才を見ているようなコントをしながら紅会長

と大兎さんが言い争っている

月光
「ああ……それと鉄　昭はいるか？」

狩野
「あぁ、昭君はそこの席だ」

と、狩野先生が僕を指差して言う

紅会長はスタスタとこっちに歩いてくる。
……昨日を思い出す。あの目を……あの漆黒の背筋が凍るあの目を
……

そんなことを考えていると紅会長は僕の机の前に立った

月光
「鉄　昭……」

昭
「あっ……はい……」

月光
「お前、生徒会に入れ」

昭
「へっ！？」

昨日ことで何か言われると心構えしたのがあっさりと粉砕し逆に驚きに変わった

月光
「お前の身体能力と頭脳そのままにしておくのが惜しい……只とは言わん……この俺がお前の記憶を探してやる」

昭
「……っ！」

月光
「はい、かＹＥＳで答えろ」

冷たい目で見下ろされる恐い冷や汗が止まらないけど紅会長は僕が記憶喪失なのを知っている……なら……

昭
「はい……僕は生徒会に入ります」

月光
「ふっ……おい奴隷共行くぞ」

大兎
「誰が奴隷だ！」

月光
「おまえだ。どこからどう見ても卑屈な奴隷だろう？　それともなんだ？　体に教えてやらなければ、状況が呑み込めないか？」

と、軽く拳を掲げる紅会長に大兎さんは拳を構え

大兎
「ああ、上等じゃねぇか、昨日の晩の結着をつけ……つけ……って、あの、ヒメア。かっこつかないから、そろそろ離れてくる？」

ヒメア
「やだ」

即答である

大兎

「いやあの……ああ、まあ、とにかくてめぇに従うつもりはねぇ！
そして昭お前も月光にのせられるな！　こいつは……」

大兎さんが何かを言おうとするとドゴンという音がして、校舎が揺れる。
それに狩野先生がなんだ！　と叫び、生徒たちもきゃーきゃーと騒ぎ出す。
只、紅会長は冷静でそれが何故、どうしてこんなことになっているか知っているようで校舎の、上のほう。
五階にある生徒会室のほうを見上げ

月光
「……ふむ。その結着をは、向こうでだ。今は俺の手伝いをしろ」

と、大兎さんと僕に向かって言った。

大兎＆昭
「やだね（分かりました）」

月光
「そうか鉄（大兎）は嫌か？」

大兎
「嫌だ」

月光
「ふむ。まあいいが……この仕事に失敗すると、世界が滅ぶぞ？」

大兎
「へ？」

月光
「まあ、手伝いたくなったらこい美雷、鉄（昭）、いくぞ」

美雷
「うん！」

昭
「はっ、はい」

紅会長に僕はついていった思うばこれが、始まり。
僕の物語の始まり。
僕らの、世界と世界を繋ぐ、ちょっと大変な物語の始まり。

第十二代『紅月光・生徒会室』が本当の意味で結成されたこの日が
ーーー

すべての、物語の始まりだった。

▽

そして場所は移る。
とても

とても遠い場所に移る

そこは楽園
神々しいほどの美しさを保ち続ける人間……いや神でさえその場所に行くことは難しい場所……

そこに宝石のように光を反射させながら流れる川の近くに一人の何かが立っていた
それは

穢れを知らない純白の肌
腰まで伸びた光を吸収しさらにその輝きをます金色の髪
綺麗な天使のような優しい顔
男か女か分からない無駄な脂肪が一切ない身体
そして闇の中でもその光続けるその銀色の瞳

誰が人目見ても人はこういうだろう。

『人間ではないと』

???

「彼は今、幸せなんだろうか……」

とてもとても、悲しい声だった

???

「……あれは何故……彼を選んだのだろう」

宝石のように光を反射させながら流れる川を見ながら“それは”呟いた

???

「けど……あれは起動してはならない」

結わくそれは全世界の闇
結わくそれは全世界の原初
結わくそれは全世界の柱
結わくそれは全世界の二番目の書

その名は……

???

「原初にしての始原の闇（オール・ファースト・タルタロス）」

そう呟いた直後、一陣の風が吹いた
そして風が止むと“それは”居なくなっていた

第五章：目覚めの灯火（前編）（前書き）

燐

「出来たので投稿します。
誤字、脱字、それと感想など（辛口コメントは勘弁してください）
がありました良かったら送ってください」

第五章：目覚めの灯火（前編）

ーーー目覚めて

……なんだ？

ーーー苦しんで

……何を言っているんだ？

ーーー嘆いて

……君は誰だ？

ーーー恐怖して

……辞めてくれ

ーーー憎悪を快楽に身を浸して

……辞めてくれ！辞めてくれ！辞めてくれ！辞めてくれ！辞めてくれ！辞めてくれ！

ーーー殺シに行こうヨ……

……君は……

ーーー私と貴方だけが住める世界の為に

ガタンっ！

桜

「ひゃ！」

昭

「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」

“アレ”は何だ？
俺は何を見ていたんだ？
俺は何故苦しんでんだ？
俺は何故嘆いたんだ？
俺は何故恐怖したんだ？
俺は……一体何に憎悪を抱いたんだ？

まるで寄生虫が頭の中を這いずり回り俺の脳を奥へ奥へと侵入して
いくよう酷く酷く気持ちが悪い
喉元には既に朝食べたであろう物が押し出し今にでも吐きそうだった

桜
「昭君……大丈夫？」

僕の目の前には宮坂高校のセーラー服を着た
鳴風　桜さんが居た

昭
「……だっ、大丈夫だよ。ありがとう桜さん」

桜
「ほっ、本当に？」

うん、嘘だ
体から何かが沸いていくような感じ……凄く気持ちが悪くて更にそ

れを体が拒絶するように再び体の中へ押し込む。けど何かが沸いていくような感じは更に湧いてきて更に体を気持ち悪くする
正直あまり耐えきれない

昭
「心配かけて御免ね？……ちょっとトイレに行ってくる」

あまりの気持ち悪さに意識が朦朧とし足取りも何だか不安定だけど何とか教室に出た

昭
「風邪……でも引いたかな？」

廊下の壁に手を起きながら一歩、一歩、歩きトイレに行こうとしたが……

ーーーちっ、仕方がねぇな……

どこからか聞こえた。
声、それはめんどくさそうに呟かれた。
けど、そんなことはどうでもいい問題は俺がこの“声”を知っているからだ。
只、知っているだけ……記憶はしている。
しかし、思い出せない。必死で先ほどの言葉を思い出す

何処で聞いた？何処の場所で？何処の時間で？……けど、答えは何時も一緒……“分からない”
まるで此処からは思い出すな考えるなと言わん秤に頭痛がする……
これはまるで“呪い”だ。

昭
「僕が……一体何をしたんだよ……！」

ゴンッ！。っと力任せに壁を殴る。
コンクリートで固められた壁、普通の人間ならば骨でも折れてしまうだろうかと思うだろう……けど、僕はそんなこと無い
最初からある僕の力“不死”ともう一つ“人並み外れた身体能力”
……そのお陰か僕の腕には傷一つ無く変わりにコンクリートの壁は綺麗に拳の形を残し陥没していた

昭
「図書館でも行こうかな？」

今更、教室に戻り食事を摂る気にもなれず僕は図書館へ足を運んだ

図書館に向かうために五階に上がり図書館に着いたが……一つ疑問が出来た

昭
「（おかしい……昼休みなのに誰も居ない？）」

あまり同級生や先輩達も本が好きな人がいるのかいないのかあまり図書館には常に人が少ない。
それでも最低でも毎日二人か三人位は居るはず……そんな思考を頭の中で組ながら図書館に入ると

昭
「（不審だな……）」

机には誰かが読んだであろう本が置かれてあった。
しかし、本は開かれたままでそれを読む人が居なかった

昭
「（これは……）」

まるで……読んでいた人が何らかの怪物によって消された？
用な推理が僕の頭で完成した。

昭
「なんて……」
そんなことなんてアニメやライトノベルの中だけと思いながら何か面白そうな本は無いかと僕は探し始めた

昭
「ん……？」
適当に面白そうな本を見つけじっくりと読んでいるとふと自分のポケットの中に入れている。
携帯が鳴っていることに気付いた。
携帯を開いてみるとメールが一件あることが分かった送り主は宮坂高校の生徒会長　紅　月光だった。
メールには、こう書かれていた
月光
『奴隷共と鉄　昭へ伝令。昨日の晩、生徒会室に異次元から妙な蛇

が侵入してきていたことが判明した。見つけ次第捕獲しろ』

……はい？

蛇？スネーク？シャー？……よし。

とりあえず紅会長に詳しいことを聞かないと……僕は直ぐ様メールを返した

昭

『危険性と被害状況は？』

と、メールを送った。すると返事が直ぐに帰ってきた

月光

『名前は“蛾の大蛇”《ゲインヴィック》人を食べて栄養補給をしたら羽を生やして巣に帰る化物だ。現在、行方不明者二十三人だ。急げ》

……

……

……

…

昭
「うわ……」

蛇なのに羽生やして飛ぶ？良く分からない生物なんだなと思い先ほどまで読んでいた本を元の場所に戻しそのゲインヴィックを探しに行こうとするが……

昭
「っ……！」

背後に殺気を感じ急いで振り向くと……

昭
「何もいない？」

後ろを何度確認しても何も居なく気のせいだろうかとふと、頭上を見上げると……

昭

「あっ……」

影が昭を覆った。

昭

「しまっ……！」

直ぐ様、拘束を解こうとするが鉄　昭はそのまま“飲み込まれた”

第五．五章：目覚めの灯火（後編）（前書き）

燐

「何とか出来たので投稿します。
初めてｓｉｄｅに挑戦しましたが出来たのは相変わらず駄文でした。
誤字、脱字、感想（辛口コメントは勘弁してください）などがあれば良ければ送って下さいね」

第五．五章：目覚めの灯火（後編）

ねぇ……？
貴方は何故、生きているの？

ーーーそれは、生きて罪を償う為

罪……？
何故そんな物を償わないといけないの？
貴方は苦しくないの？

ーーー苦しいよ……けどね自分が殺してきた人に比べたら……この苦しさは耐えなければならない物なんだ

殺した人……何て気にしなくちゃならないの？

ーーー……君は少し酷い言い方をするね

……私は人を殺したことは無いけれど人は余りにも貧弱で強欲な生き物……私は人は死んで当たり前の者だと思っている

ーーー耳が痛いね。僕は一応元人間だよ？

貴方は元から人間じゃないよ？
貴方の“闇”は人には持つことは出来ない

ーーー……

だからこそ私は……鮮血と殺戮……世界の負を背負う罪遺物である
貴方を愛します。
世界の全てが貴方を否定しようとも私は何時でも貴方の傍に……

昭
「まただ……」

真っ黒な空間……あの影、ゲインヴィッキとかいう蛇の胃袋なのだろう。
今日の昼に見た何処か懐かしい声……酷く酷く悲しい声が僕の心を歪ませる

昭
「痛い……」

痛い……ただ痛い
体中のありとあらゆる所が
先ほど無理に思い出そうとしたように身体中が拒絶したようにあの
暗闇から聞こえた声を消去しようと動く

昭
「……」

もう声をあげることも辞めた
何故なら音もない空間の中では何を喋っても何も変わらない。聞こ
えないから。
一時間……いや三十分、……もしかしたら一分もたって無いかも知
れない

……紅会長の話が正しければこのまま自分はこの蛇に消化され栄養
分として死ぬだろうか……

けど、何だろう
自分は可笑しいのだろうか……死の恐怖が沸かない。
普通の人ならばあの蛇に喰われた時点で意識が飛ぶか意識が合った
としても泣きながら命乞いをしながら泣きわめくだろう

僕が感じているのは何故か安心感だった。
死の恐怖に恐れるのでもなく
命乞いをするのでもない
只この真っ黒で暗闇な空間に居る……それだけで何故か安心出来る
暗闇が……闇が僕の体を溶かしていくような感覚……あぁ…あの
時もこんな時に“彼女”に出会ったけ……

ズキンッ！！！

昭
「ア、ガ……ギ、グッ、ガハッ！」

“彼女”って……誰だ？
“彼女”って……何だ？
体が本気で抵抗をし始めたみたいだ体の至るところか冷や汗が流れ
寒い暑い寒い暑い寒い暑いと何度も体が拒絶する何度も何
度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何
度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何
度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何
度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何
度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度も体が拒絶する思い出すなとそ

れ以上なにも考えるなと……『そう……君は幸せになればいい』

昭

「誰だ……誰なんだ……誰か、誰か助けてくれ……」

頭がカチ割れるの激痛が走り体も折り曲がる痛みが……苦痛が走り
体が痙攣を起こし自分の体が崩壊していくのが判る

逃げたい
叫びたい
恨みたい
殺したい
・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺
殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺殺
殺殺殺殺斬殺喰殺喰殺惨殺穿殺虐殺貫殺呪殺溺殺凶殺殴殺瞬殺狂殺
渇殺恐殺絞殺羣殺撲殺殴殺

何故自分はこんな思いをしなければならないだろう。自分が特殊だ
からか？
だとしたら……僕は

――違う

昭

「えっ……」

聞こえた、体も精神もボロボロになった時に聞こえた
何処か懐かしい声が

ーーー彼女がお目覚めの準備だ

彼女？
彼女って誰だ？
誰が僕を……俺を苦しめているんだ！？

ーーーそれは、言えないが……まぁ、いいとりあえず

昭
「グッ！」

突然後ろから頭に鈍器の用な物で殴られた衝撃が走るそしてそれと
同じタイミングで自分の意識が途切れていくのが分かる

昭
「っ……！」

最後の力を振り絞り頭を後ろに向かせるせめて自分を殴った奴の顔
ぐらいは見てやると

昭
「えっ……？」

そこに……僕の目の前に映ったのは
真っ黒な暗闇な闇を連想させるような黒髪に
鮮血を浴びたようは真っ赤な赤い紅い赤眼に
そして……自分と“全く同じ顔の誰か”がいた

大兎　ｓｉｄｅ

大兎
「おい、月光……昭は……」

俺とヒメアと月光はへんな人を小バカにしたような化物から吐き出
されたゲインヴィッキが襲いかかる
俺達はその攻撃を避けながら月光に問い詰める

月光
「鉄　昭はゲインヴィッキに飲み込まれた……みたいだな」

大兎
「マジかよ……」

鉄　昭……戸籍上は俺の弟になるやつでかなり身の回りがよく出来るやつだ
料理や家事、勉強、何をやっても完璧で何をやっても欠点がない天才と言っても察しがない位の凄いやつだ

大兎
「早く、助けないと……！」

ヒメア
「ねぇ、大兎、昭って誰？」

沙糸ヒメア……薄桃色の長い髪に真っ白な肌。つんと高い鼻に、艶のある、綺麗なピンク色の唇。スタイルのいい細身の身体……俺には勿体無いくらいの美少女だ

大兎
「一応俺の弟になるかな？　とてもいいやつだよ」

ヒメア
「へ〜〜え……」

月光
「無駄話は後でしろ」

大兎
「おお……！」

とにかくあのゲインヴィッキという奴から昭を助けないと！っと空手の構えを構えたその時だった……

ーーー武装召喚……天終

一瞬、一瞬だった何も思考も追いつかない速さでその声が聞こえた
そしてその声が声として認識された時にはゲインヴィッキはバラバラにされていた

月光
「なっ……！？」

月光からは何かが見えたらしい俺もよく見ていると一人誰かが立っているのが分かった

大兎
「あ……昭……？」

あれは昭なのか？
彼奴の宝石のような綺麗な銀色の髪は光をを拒絶するような銀色になり晴天のような蒼色の目は右目だけになり左目は紅い赤い血を浴びたような真っ赤な赤眼になっていた
そして、手にはゲインヴィッキを切り裂いたであろう二つの漆黒に輝く剣……人目で分かった彼奴は昭じゃないと

大兎　ｅｎｄ

昭（？）
「……」

天井の隅にあった影……ゲインヴィッキが作り出した巣はその形を維持できなくなり一人、二人と宮坂高校の生徒を吐き出していくそれを見た昭（？）は小さく呟いた

昭（？）
「浮遊（フライ）……」

そう呟くと重力に従い床に落ちる筈の生徒はフワリと浮かび吐き出されていく生徒も次々と浮かばし優しく床に下ろした

大兎
「昭……？お前、昭なのか？」

昭（？）
「……」

しかし、彼は何も言わない
彼は生徒全員を下ろした時、要約大兎達の方を向いた

月光
「答えろ。お前は鉄　昭か？それとも化物か？」

昭（？）
「フッ……」

昭（？）初めて感情を見せたそれはそれは興味を抱いた子供のような顔だった

月光
「っ！？」
大兎
「えっ！？」
ヒメア
「わぁ、早……」

そして昭（？）は一瞬で大兎達の後ろを取った
その手には不気味に光る二つの黒い双剣

昭（？）
「紅月光……先ほどの答えは半分が正解で半分が不正解だ」

月光
「……なら体が昭の物で中身は別の物と考えていいな？」

昭（？）
「あぁ……正解だ、流石自称“天才”だな」

月光
「あぁ、俺は天才だ」

昭（？）
「ククク……あぁ、そうだ紅月光……」

月光
「先ずはお前は誰だ？」

月光は凶剣（スペル・エラー）を昭（？）に向け質問をした

昭（？）
「本名は訳があって言えないが……俺のことは殺戮者（スレイヤー）と呼んでくれればいい」

月光
「殺戮者（スレイヤー）……ならもう一つ昭は何処だ？」

スレイヤー
「俺の中で睡眠中だ」

大兎
「それじゃ……大丈夫なんだな？」

スレイヤー
「あぁ……後、おれから一ついいか？」

大兎
「えっ……」

スレイヤー
「これ以上、昭を荒行事に巻き込むなでっないと……」

月光
「……殺すか？」

スレイヤー
「あぁ……そうだな人間は力差を見せつけないと分からない生き物だったからな……詠唱破棄（エレメント・カタストロィー）」

徐にスレイヤーが天井に剣を逆手に持ち変え右手の人指し指を向けて呟くと

ドゴオオォォォンンンン！！！！！

巨大な虹色の極光が天井を余裕で貫通しその真上の入道雲を消した

大兎
「あああああ……」

ヒメア
「嘘……詠唱破棄であんな威力が凄い魔術なんて……」

月光
「……」

スレイヤー
「俺がその気なればこの町なら三分あれば命なんて物は一生生まれない地に変えることは余裕だ……まぁ、考える時間ぐらいはやるから……こいつ（昭）を頼むぞ」

すると光を拒絶するような銀色は綺麗な銀色に変わり左目は右手と同じ蒼色に戻りその手に握られていた双剣は消え昭はゆっくりと地面に倒れた

ーーーこれでいいだろ？　“破壊神”

とりあえずキャラクター紹介（前書き）

燐

「どうも、作者の燐と言います。キャラクター紹介を書いてみました。ネタバレがあるかもしれません。誤字、脱字、感想などがありました良ければ送ってきて下さい」

とりあえずキャラクター紹介

鉄昭（くろあきら）

年齢：１６歳？

能力：不死と人並み外れた身体能力

記憶喪失の少年
偶然、鉄家に拾われ養子になった。
もはや人間の領域では無い身体能力を持つ
性格は自分のことより他人を優先する所謂お人好し
かなり頭もよく性格も顔をいいので学校でかなりモテるが本人は全く自覚無し

鳴風（なるかぜ）　桜（さくら）

年齢：１６歳

能力：？

友達思いの中々の美少女
昭に好意を抱き何とか振り向かせようとするが昭に対して正直で無いため全て失敗している
実はある秘密があるらしい……

殺戮者（スレイヤー）

年齢：１６歳？

能力：？？？（魔法が使える）

突如現れた昭のもう一つの人格
圧倒的に強くその力は神種でさえ恐る程
性格はかなりフレンドリーに話すが実は何よりも殺戮を楽しむ狂乱者
昭の体には昔から居てたらしいだがとある人に命令（強制＆脅し）
され今は渋々従っている
能力は分かってないが剣を何処からか出したり魔法を使ったりと謎が多い

？？？？

年齢：？

能力：？

昭の夢に良く出てきている謎の人物
金髪銀眼と変わった容姿で人間ではありえない程の美しさを秘めている
何時も昭のことを心配しているように見えるがその実態も実力も謎のままである
スレイヤーはこの人物を破壊神と呼んでいた
因みに性別不明

？？？？

年齢：？

能力：？

スレイヤーと昭は彼女と呼んでいたからにして女性と分かるがそれ以外は全てが分からないまた謎の人物
人間では無いのかどうやら酷く人間を見下して“死ぬのが当たり前の生き物”と言った少々壊れた発言をしている。昭のことを罪遺物と呼び愛していると発言していると言うのが分かるがこれもまた全てが謎のままである

第六章：闇（前書き）

燐

「どうも作者の燐です。何時ものように何とか頑張って書いて投稿しました。

相変わらずの駄文良ければ見てください。

誤字、脱字、感想等がありましたら良かった送ってくれると嬉しいです」

第六章：闇

一人を殺した時は悲しんだ

三人を殺した時は嘆いた

七人を殺した時は恐怖した

１００人を殺したら……それは快楽となっていた

昭

「知らない……天井だ」

目に入ってきたのは真っ白い天井だ

昭
「……保健室か」

何処か薬臭い匂いがし辺りを見渡すとそこには薬や包帯等様々な物が置いてあった

昭
「携帯は……と」

辺りを見渡し机に置いてあった携帯を見つけ開いてみるそこには二件のメールがあった。送信者は大兎さんと紅会長だった
大兎さんからは体は大丈夫かとか書かれていた紅会長からは起きたら生徒会室に来いと書かれていた

昭
「……」
とりあえず大兎さんには大丈夫です。心配を掛けてすいませんとメールで送信し僕は保健室の扉を開き中央校舎五階……生徒会室に向かった

昭
「二時三十分」

今の時刻を携帯で確認したたしか自分がゲインヴィックに飲み込まれてしまったの一時ちょっと手前位だったと思う……そして自分の記憶が正しければ確か空は雲一つ無い晴天の青空……だったはず……なのに

昭
「……赤い雨……？」

ふと、ガラス越しから外の風景を見るそこには黒い雲で覆われた空。光が一切遮られていてその光景は常闇の用に感じられた
更に黒い雲からは雨が降っていた。只それは人の血の色で降っていた

昭
「気持ち悪い空だな……」

少し歩く速さを速める。

今、何が起きているのか否、一体何が起きようとしているか……事実、先程から『キチカチキチ』、『カチカチカチ』と虫が歯を噛み合わせているような音が聞こえる

昭
「……あれ？」

丁度五階に上ぼった位でふと声が聞こえた。それは悲しさや苦しさが混じった声だった

昭
「嫌な予感がする」

足に力を込める。
何故かある人を超えた力で兄に力を貯め、それを……解き放つ！

ドンッ！

大砲が撃たれたような爆音と共に俺は電光石火の如く“翔んだ”

昭
「あ……！」

見つけた
目線の先には二人の男女大兎さんと沙糸さんだった二人は手を繋ぎ
懸命に“何か”から逃げていた

昭
「大兎さん！沙糸さん！」

大兎
「！？昭見るな！」

突然の叫び、“何か”を見るなと言っているのだろうか？

昭
「へ？」

ヒメア
「大兎！？」

突然の出来事だった“何か”が大兎さんの左ふくらはぎに触れたの
だそれは分かるだが“何か”が触れた左ふくらはぎは消滅した……
傷つくとか切られたそんなものじゃないそこから“消えた”のだ文
字通りに

ヒメア
「や、やっぱりだめ……追いつかれ……」

大兎
「黙れ！　大丈夫だから！　もうすぐ、もうすぐつく！」

それは悪夢のようだった。
大兎さんの体は“何か”が触りまた触りと触り先程と同じ消えていった

ヒメア
「だ、だめ……やっぱり無理だった……天魔の気に触れたら……大兎の体がなくなっちゃう。大兎、手を……」

とても悲しい声で沙糸さんは自分を離してと言っただが……

大兎
「放さない！」

と、大兎さんは叫びそのまま思いっきり沙糸さんの手を引っ張り、前に押し出す。沙糸さんは廊下に倒れそうになったが何とか僕が支えた

大兎
「ヒメア、昭、先にいけ！」

大兎さんそう叫んだ

大兎
「先に生徒会室にいって月光を呼んでこい！　昭！ヒメアを頼んだ！」

倒れそうになった大兎さんは僕にそう告げた
そして“何か”は大兎の体を壊すように触り左足、右腕、倒されそうになった時にもう一度右脚に触れもう走れなくなって

ヒメア
「ま、待って！　私、抵抗しないから！　素直に犯されるから、大兎を……彼を消さないで！」

今、沙糸さんの声で要約理解できた。この“何か”は大兎さんを消そうと殺しているだなと……

昭
「なんで……」

なんで？
少し前までは平和だったのに……少し前までは平凡な日が続いていたのに……なんで？

ーーーちっ、おい！鉄昭、正気を保て！
闇を感じるな！負に身を任すな！お前の存在が彼女によって堕とされるぞ！

頭の中から誰かが叫ぶだけどそれは聞こえるだけであって理解できない
今自分が何を見ているのかも何を感じているのかも何が聞こえているのかも
嫌……あった感じたこれは憎悪だ
大兎さんを傷つけた物……自分の平和を脅かすものそんな存在は……
……

ーーー殺シテヤル

いつの間にか俺の手には一つの銃剣が握られていた

リボルバー式の最早剣と剣と言っても差し違いが無い深淵の闇を具現化したような武器だった
それが今俺の手の中にあるそしてこれが一体どんな物なのか
一体どんな使い方をするのか
一体どんな殺し方が出来る
など、全てを理解することが出来た

昭
「■■■■■■■ーーーーー！！！！！」

俺はそれを持って“天魔”と言われた物を半分に切り裂いた

大兎
「なっ！？」

天魔と言われた化物は半分に切り裂かれたが別れた二つはくっつき再生した……斬撃は効かない……細かく再生出来ない程切り裂くか？……却下
なら銃撃？こいつの存在を消し飛ばす？……採用

まるで体がその状況を分かっていたように動く
手にした銃剣はそれに意思を持っているように動き手に掴んでる部分がグリップ状に変化し銃口ではない否この銃剣には銃口は無い只、体がそう動き剣先を天魔と呼ばれた化物に向ける

銃剣の周りには幾つも魔法陣のような物が何重にも構成され剣先には黒い漆黒の黒弾が創られる

昭
「ジ・エンド・ドレッドルート」

そう俺は告げた
その瞬間黒い漆黒の黒弾は放射され黒い閃光になり天魔は断末魔すら無く消滅させた

ヒメア
「嘘……天魔を…天魔を殺した？」

大兎
「お前は……スレイヤー？か……昭か？」

誰かがそう呟いていたがそれを理解する前に僕は意識を失い冷たい廊下に倒れた

闇……
何も無い
光など無い
全てが無い
何故ならその存在は無いからだ
そこにはありとあらゆるが存在を許されることはない
そこでは善も悪も強さも弱さも何もかもが無い
その中で彼女は居た

何故全てが存在を許されることはない所に存在出来るのか？
答えは簡単だ彼女自身が闇だからだ
この場所を作ったのも彼女
闇を作ったものも彼女
全て彼女が創造したものだ
だからこそ彼女はこう呼ばれている
始まりにして
起源にして
始原にして
原初にして

“闇”だと

アハハハハハハハ

彼女は笑う
彼女は動く

彼女は踊る

それは舞うように
それは祝いように

彼女は笑みを浮かべそっと闇に手を向ける
闇はそれを理解したように分解、再構築し一つの映像を流したそれ
は血の雨が降る丘に幾多の武器が地面に突き刺さっている丘に一人
……彼は立っていた

彼女は彼を見る何度も何度も何度も何度も何度も何度も何度
も何度も何度も何度も何度も何度も何度も見る見る見る見る
見る見る見る見る見る見る見る見る見る見る見る見る見る見る
見る見る見る

そしてその目は愛に満ちていた
彼女は闇……何も感じることもない存在だが彼女とは違うそれなの
に彼女と同じ闇を持つ彼を愛した

彼は何もない自分に名前をくれた
彼は何もない自分の場所になってくれた
それだけで彼女は彼を恋をする愛すること条件には十分だった

……彼女の名前はティシフォネ

世界への無限に永遠に復讐を約束する悲しき愚かな狂った彼女

第七章：真実を隠す者（前書き）

燐

「どうも作者の燐です。今回は少しだけ笑いを入れてみました。無茶苦茶で滅茶苦茶ですけど良ければ見てください」

第七章：真実を隠す者

死と言うのはどんな物何だろうか
死苦、死有、死絶、死出、死毒、死病、死物、死没、死魔、死滅、
死霊、死門

色々な死があり様々な意味がある一般的に命が亡くなることを死と
言うのだろう

でも……俺にはそれが無い。
理由はとても簡単で切ない理由だ
与奪されたのだ死をそして生も
言わば俺は生殺与奪された存在だ
だからこそ“生”がない
だからこそ“死”がない

罪深き俺に残ったのは罪と罰そして“無”だけだった

月光
「……」

一人、生徒会室の中の椅子に座っている人がいた彼の名は紅月光…
…彼は今なにかを考えるように押し黙っている

生徒会室の中は滅茶苦茶だった
様々な物が割れたり、砕けたり、破壊尽くされた部屋の中で、彼は座っている
運良く無傷であった椅子に座り彼は思考を動かしていたのだ

原初にして始原の闇（オール・ファースト・タルタロス）

あの時、昭が持ちそしてあの自分の力では最悪の相性の化物……《天魔》を一瞬で葬った物の名前らしい
自分の主力武器とされる凶刃（スペル・エラー）……その力は悪魔でも神でさえも祓うすることが出来るほどの武器、正し《天魔》は例外で何故かその力が使えないが……

月光
「（彼奴……結局何者なんなんだ？）」

彼は天魔と契約した
最古の魔女（ラミエル・リリス）をサイトヒメアを殺す方法を教えると彼方が一方的に訴えかけてきた
しかし彼は仲間（奴隷）を見捨てるような男ではなかった。
そして彼女は知らなかった最古の魔女（ラミエル・リリス）のこと天魔が恐る存在を……
その為、お互いの意見が一致しサイトヒメアの中にある最古の魔女（ラミエル・リリス）を封印をすることでお互いが納得しあった。

今の彼があるあの時、もし……交渉が上手くならなければ今の彼は居なかっただろう

月光
「（……あの天魔が敬語で更に恐怖を抱いていた彼奴は……）」

彼は思い出す。
今は大兎やヒメアが馬鹿そうに笑い合う会話が聞こえてくるがそれを少し睨み静かに彼は思い出すほんの数十分前の記憶を……天魔と破壊神と自ら名乗った何者かを……

月光
「ぐっ……」

彼は今自分の相棒でも奴隷でも安藤美来に支えられた
幻術の類いか消し飛んだ、という感覚が右腕、左腕、右足、左足、内蔵が弾け、首から下がなくなる……そんな感覚に犯されていた

月光
「勝った、つもりか？」

天魔
『お前の中に、最古の魔女（ラミエル・リリス）を殺すことができる力を入れた』

月光
「……応えろ。これでおまえは、勝ったつもりか？」

と、聞く
たが天魔はまるで神のような強大な天魔は彼も入れて人間など会話するに値するほどの価値すら無い生物ではないのだ

天魔
『あとはお前の判断に任せよう。孤独の中で狂ってしまったサイトヒメアが、再び《最古の魔女》として目覚め、《天魔》を使おうとしたら、あの女を、殺せ』

と、そう言った
月光は疑問を抱いた

月光
「……天魔を使おうとしたら……だと？　天魔はおまえのことじゃないのか？」

だが、その疑問が晴れることは無く天魔は笑う。笑うだけでなにも答えない。さっきからずっと、こいつらが何を言いたいのか全く分からないのだが……その疑問は以外な乱入者によって解かれた

???

「彼は確かに天魔だけど正確には天魔の遣い……だよ」

月光

「っ！？」

後ろからの突然の声

振り向くと“白”、真っ白い全てが赤い大地には余りにも目立ってしまうほどの純白のコートを来た誰かがいた

月光

「お前も……天魔か？」

???

「ふふ……確かにこの地に居たら確かに天魔だと思われちゃうかも知れないけど僕は天魔じゃないよ」

と、言い

誰かは笑った純白のコートを被っているせいか顔も見えないが声で

笑っていたいたため直ぐに分かった

天魔
『……この地に何かご用ですか？　世界神様』

月光
「（こいつが様付けだと……？）」

見るからには真っ白い純白コートを来ているが形は人だった性別は分からないが代々自分より少し背が低く人ならば同年代位の人だった人ならばの話だが……

世界神（？）
「まぁね……お宅のお仲間様が……うちの部下に手を出したぽっくってね……」

天魔
『！！！……そっ、そうですか。』

明らかに動揺している自分には笑うだけで人間には話す価値すら無いと思われた天魔が恐怖を抱いている
だとすると……こいつは“人間”ではないそんな答えが直ぐに月光では解かれた

世界神（？）
「おっと……自己紹介がまだだね、僕は世界神の三柱の一角破壊を司る神、破壊神……“夜天　空”だよ」

その言葉に月光は目を開いた
今目の前に居るのは天使でも悪魔でも無い……神だと
様々な神話を知っている月光だが夜天　空と言う名前の破壊神は居ない破壊神と言えばヒンディー教の破壊神“シヴァ”が思いついただが、こいつは自分のことを最初に世界神と呼んだ……世界神など聞いたことがなかった

空
「初めて聞くっ……て。顔だねそうだね人間が世界神に接触することすら全く無いからね……」

月光
「……」

天魔
『世界神様……人間なぞに何故自分から……』

空
「部下のお世話を見てもらっている……と言えばいいかな？」

月光
「……鉄　昭のことか？」

空
「へ～～、今そんな名前なんなんだ……」

と、夜天　空と破壊神と名乗った神は少し楽しそうに少し寂しそうに呟いた

空
「と、こんな話をしている暇じゃなかった……天魔さっさと部下を解放しろ」

天魔
『……それは出来ません』

空
「……何？」

今まで優しい透き通った声が歪んだ

天魔

『最古の魔女（ラミエル・リリス）を遂に発見したので消滅させるため世界を救うため今は引けません』

空
「最古の魔女（ラミエル・リリス）ね……聞いたことはあるけれど……君」

月光
「……なんだ？」

空
「天魔も話を聞け
最古の魔女（ラミエル・リリス）は今自分がそうであったことを忘れている。だからはっきり言って今は無害だ……だから此方としはもっとヤバい問題がある……もし此方の要求が飲めるようならば最古の魔女は今は放置しておくとするよ」

天魔
『まっ、待ってください。勝手に話を進めさせられては……』

空
「忘れているならお前の部下を使って封印したらいいだろう？
簡単じゃないか」

天魔

『しっ、しかし……』

月光
「此方にしてもメリットがあるが俺は何を飲み込めればいいんだ？そして最古の魔女より厄介な問題とはなんだ？」

空
「ん？……簡単だよ、彼を…鉄　昭を出来るだけ厄介事から遠ざけてくれない？
後、僕のことは全て絶対に秘密、」

月光
「……はっ？」

神からの要求
一体どんな滅茶苦茶な要求が来るかと身構えていたが言い渡されたのはとてもシンプルなことだった

空
「彼奴は戦闘を繰り返すことで徐々記憶を取り戻していっている……そしてアイツが記憶取り戻したその時は……」

月光
「……」

空
「この世界は間違いなく……“消えるだろうね”。１００％の確率で」

月光
「……最古の魔女よりも危険な物かそれは？」

空
「物でも者とも言うね……アレは僕もよく知らない……けど、アレが始動したら世界はノンストップの終焉のカウントダウンを始めたものだからね」

月光
「分かった……」

空
「良かった。物分かりのいい人間は好きだよ♪」

月光
「厄介事に巻き込まなければいいんだな？」

空

「うん！」

月光

「……」

まるで欲しかった玩具をやっと貰ったような子供のように笑う破壊神

本当にこいつ神か？

と、疑うほど喜んでいた

空

「じゃ、実を言うと仕事中に勝手に抜け出したから従者がカンカンに僕を探し回っているからじゃあね～～？」

と、嵐のように本当に神か自分のイメージとは少しいや大きく乖離した神様は何処かに消えていった

天魔

『……遣いをお前に貸す。まぁせいぜい頑張ることだ。最古の魔女とその鉄　昭と言う奴のことはな……あのお方が介入した時点で我々は少なくても手を出さないでいてやる……』

それに月光が口を開こうとしたところで、突然目の前から消えた

赤い大地も姿を消し代わりに滅茶苦茶に破壊された生徒会室……月

光はその惨劇に一つ溜め息を付き

月光
「さあサイトヒメアに会いにいこう。本当にあの魔女がくるってしまっているのか、調べる」

と、立ち上がり
月光は走り出した。
五月蝿く吠える奴隷（大兎）の方へ……

その頃……

空
「あの〜〜イクス？
さっっっすがにこの量は無いんじゃないかな？かな？」

イクス
「駄目です。私が目を離した隙に逃げるとは言語道断です。昔の自

分に深く反省しながら仕事をしてください」

空
「この悪魔!、魔王!、鬼〜〜」

イクス
「私は邪神です。
口を動かす前に手を動かしてください」

空
「うぅぅぅぅ……」

昭がジ・エンド・ドレッドルートを使っていたときの会話でした

チャン、チャン♪

空
「不幸だ!」

第八章：大兎の優越（前書き）

燐

「どうも作者の燐です。今回はかなり短いですが大兎を視点に書いてみました。
相変わらずの駄文ですが良ければ見てください。後感想などをくれると凄く嬉しいです」

ＰＳ　作者は今ＩＳにどっぷりはまっている

第八章：大兎の優越

とても……とても
長い時間
それは幽暗の如く
深く深く
重なりあいそれは記憶となる
その記憶は自らも重なりあいいずれ小さくなり消えていく……それはまるで陽炎のように……

大兎
「……」

大兎は今自宅に帰っていた。
本当ならばあの無茶苦茶ムカつく俺様生徒会長の家に行く予定だったが月光に昭のことを任され一度家に帰ることにした

昭
「スー、スー、スー」

背中には規則正しい息遣いで寝ていた。義弟の鉄　昭……ほんの数年前道バテで倒れていた昭を偶然発見した

大兎

「本当にビックリしたな……」

よっ、と昭を持ち直し家に帰るため足を動かす

大兎

「……」

今でも覚えている。

とても印象に残った。“昭の近くに置いてあった一通の手紙”の内容

『これを見てくれた人お願いです彼をーーーーを幸せにしてください』

ーーーーの部分は消しゴムで後から消したようで読めなかったがこのたった一行で彼は鉄　大兎はその手紙を持ったまま少しの間だけ動けなくなっていた

もちろん、混乱やまるで犬を捨ててるような手紙の内容だったがその真っ白い紙は所々が湿っていた。

涙だろうかこの手紙を書いた人は涙を流しながらこの手紙を書いていたのが何故かよく分かった

大兎

「……あの後は大変だったな」

その後、大兎は昭を今のように背負い病院に走った。

酷く衰弱していたのが今のように規則正しい息遣いでは無くとても苦しそうに意識が無く息をしているのが不思議な位弱りきっていた

大兎
「あの手紙……結局見つからないな」

色々と体を検査し意識が戻ったと看護師に言われお見舞いに行ったとき記憶喪失が分かりあの涙で湿った手紙を昭に見せようとしたがポケットに入れた筈の手紙が無かった
まるでその手紙が合ったこと事態が夢幻のように思えた

大兎
「まっ……早く帰ってあの月光の家に行かないとな」

ヒメアに助けられ
月光に助けられ
美雷に助けられ
昭に助けられ
馬鹿みたいに助けられる自分が悔しかった何年も空手に打ち込んだにも関わらず生徒会委員の仲間の中で、一番死にまくるのは自分だ

大兎
「ただいま」

自分には何が足りない？
ヒメアに貰った力“１５分の間……９００秒の間なら七回までなら

死なない”そして“貂魔の炎”と呼ばれる全てを焼き尽くす刧火……貂魔の炎は余りの火力の性で一度使えば一度死ぬことなる（死因は上半身損失？）

大兎
「よっと……」

昭の部屋に到着し
ゆっくりと昭をベッドに寝かせる
……それでも足りない……昭を……ヒメアを守るためにはもっと力がいるこういうことなら月光が詳しいと見込んだ大兎と先程こっそりと隠し見た宮坂高校住所録から見た月光の家の住所を調べ聞くのだ

土下座してでも俺の大切な者を守れるならこんな頭一つや二つ軽いものだろ？

と、思考を動かしゆっくりと大兎は家から出て進む……その瞳には決意が秘められていた

第九章：影の裏側（前書き）

燐

「どうも作者の燐です。今回はとりあえずまた頑張ってみましたが中々恋文？って書けませんね難しいです

さてさて、相変わらずの駄文ですか良ければ感想を送ってもらえると嬉しいです」

ＰＳ　ＩＳの二次創作をやろかと模索中……鳳凰　鈴音と布仏　本音が可愛いと思うのが自分だけだろうか？

第九章：影の裏側

桜が舞う
その命は更なる光となり輝きを増す
その存在を肯定するように
こんな罪深い俺でもこんな気持ちになるだなんて
あぁ……世も捨てたものじゃないな……

昭
「いい天気だね」

桜
「そっ、そうね……」

雲一つない晴天の青空。そこにとある商店街に二人の影があった
今日は休日、約束により二人は合った
どちらかはデート
どちらかは‘ただ’のお付き合い
としか思ってないが……どちらかどちらかは保留しておこう

桜
「今日は来てくれてありがとう昭君」

昭
「こちらこそ誘ってくれてありがとう」

と、笑顔を送る

桜
「うっ、うん」

何故か桜さんは下に顔を落とす何故か頭に湯気のようなものが見えるような気がするが気のせいだろうか

昭
「えっと……それじゃ行こうか」

桜
「うっ、うん！」

と、商店街に歩もうとするが僕は足を止めた

桜
「？」

休日なのかかなりの人数が目に入ったため……

昭
「手を繋げようか」

桜
「へっ！？」

？？？
どうして顔を真っ赤にするんだろう
熱でもあるんだろうか……

昭
「顔が真っ赤だけど大丈夫？」

桜さんの額と僕の額に手を当てて熱を比べる

ボンッ！

桜
「〜〜〜〜〜〜〜〜！！！」

うわ！いきなり熱くなったよ大丈夫なの！？

昭
「だっ、大丈夫！？。いきなり熱くなったけど？今日は休む？？」

桜
「だっ、大丈夫よ……だっ、だから早く手を離してくれない……？」

とりあえず手を額から離す。離すとき少し悲しそうな顔をしたけど何なんだ？

昭
「？　とりあえず行こうか」

拉致が中々開かないと思い少し強引に手を繋ぎ引く

桜

「あっ……うん！」

まだ顔が赤いけど手を繋いだらいきなりニコニコし始めた……女性ってコロコロ表情が変わるな～

桜

「♪～～～♪～」

今僕達は服屋【ミラクリ】に来ているそして桜さんは可愛い服を見て自分に会わしては見ての繰り返しどれも可愛いと思う

桜

「昭君！どれがいいかな？」

と、様々な服を見せてくるう～～んファッションセンスなんて僕には無いんだよな～～

昭

「う～～ん、それじゃあ」

困り果てているとふとピンク色の肩が露出した部分部分にはフリル
のあしらいがあり可愛いらしさが感じられるワンピースが目に入った

昭
「これなんてどう？」

そのワンピースを桜さんに渡す
すると桜の目が金貨を見つけた猫のように光だす

桜
「わぁ……可愛い！。ちょっと試着してくる！」

と、ワンピースを片手に試着室に入っていった

昭
「……」

それを見送ると僕は近くの壁に寄り添った。
……ほんの数日前大兎さんや紅会長が戦った“天魔”と呼ばれる存
在が襲ってきたから……何故か僕だけ生徒会室に入ることが少なく
なった

この頃はほとんど書類の整理しかしない。何故か遥ちゃんもこの頃欠席続きだし……また、何か合ったのなか？
そんな本能……嫌な予感がした

桜
「ジャーン！どう似合っている？」

声が聞こえた方へ顔を向けるとそこには……桜花があった
桜色の髪がフワリフワリと浮かびそれに合わしてピンク色のワンピースもフワリフワリと浮かび桜が舞っているような幻想に包まれた

昭
「……うん、凄く可愛い桜さん」

桜
「そう／／／。ありがとう！」

でも、いまこの時間位は幸せに酔いしれたい
君の桜が舞う散るような笑顔を見ながらこの今を守れる力が欲しいと渇望した

▽

何デ？、何デ？

何デそんナ“死人”に笑イ掛けルノ？

許サナイ！

私の――様を！
私の為の――様を！
私だけの――様を！

コロシテヤル！

グシャグシャにシテヤル……

――様の前デ！

ソノ汚い全てガ汚いソノ身ヲ地獄に深淵に叩キ落とシてヤル

貴方様の笑顔は私の物ダ！
誰ニもだ！

ケラケラ

と、女神は笑うこの世の終わりまでその手を血に染め笑う
口が裂けるほど半月の形を作りながら
狂気をその身に宿し
全てが血に染まるその時まで・・・・・・彼をーーす

第九章：影の裏側（後書き）

燐
「この小説初めての後書き～～いっきま～す」

月光
「死ね作者」

燐
「わぁ！？　いきなり凶刃（スペル・エラー）を降ってくるな！危ないだろうが！」

月光
「ちっ……外したかだが次は外さん」

燐
「ちょw、おま、人の話を……」

月光
「こいつの存在を消せ凶刃（スペル・エラー）」

燐
「わぁわぁわぁ……たったたた……助けて～～～（泣）」

ピチャーーーン！

月光
「よし……邪魔者を始末した。この二次創作を見た愚民どもに告ぐーーこの二次創作を見てもうわかってるな？おまえら全員、いまから俺の奴隷……」

大兎
「違うだろ月光！」

月光
「なんだゴミ」

大兎
「なんで俺がゴミなんだよ！」

月光
「ゴミクズ顔だろうが」

大兎
「おまえぶっ飛ば……と、言い争ってる場合じゃなかった……ええとこれ、おまえ、後書きだぞ？」

月光
「そうだな」

大兎
「じゃあこの二次創作を見てくれたみんなにありがとーとか言えよ。この二次創作はすっごく楽しいでーすとかさ」

月光
「うん？このそこらへんのゴミ袋に入っていそうなこの駄文をか？」

大兎
「いや……それは言いすぎのような気が……」

月光
「まぁいい……この二次創作見た俺の奴隷共感想などを送ってくるのは別にどうでもいいが失望させるような感想を送ってくるなよ？」

大兎
「さらっと、問題発言しやがった……とりあえず作者さんも頑張っているぽいっから良ければ感想を送ってきてくれると嬉しいかな？」

月光
「次回はまだ決まってないが俺が活躍するのは見えているな。
それじゃあな奴隷共」

燐
「こんな感じの後書きでいいのかな……？」

第十章：憧れの背中（前書き）

燐

「どうも作者の燐です。本当に申し訳ありません。携帯が壊れたり試験だったりとバテバテしてここまで遅くなってしまいました。しかし相変わらず出来るのは駄文しかも滅茶苦茶短いと言うこと……心が折れそうですがなんとか頑張りたいと思っています」

ＰＳ　ＩＳの小説転生かトリップかどちらがいいですかね？転生の場合は箒＆束ヒロイン。トリップの場合は本音一筋とお悩み中です……

第十章：憧れの背中

苦しい
何故自分がこれほど苦しまなければならないだろうか？
何故戦争や貧困が生まれるかのように
そもそも人間が何故生き物という存在が生まれるのか
自分には分からない
無知は罪
知らなければならない
この気持ちに
この感情に
それにどんなに困難があろうとも
それを受け止め歩いていく
何年、何十年、何百年、何千年掛かろうとも……
さて、その気持ちが感情が“復讐心”と気がつくまでアトナンネン？

昭
「・・・・多い（汗）」

今僕は紅会長に任された書類の山と戦っていた。全く知らない単語や自分もよく知らない《軍》に関するものなどたくさんありすぎてこんがりそうだ

昭
「大丈夫かな・・・・」

今僕を覗き生徒会全員は遥ちゃん捜索の為にエルフが存在する異世界に探検している。桜さんとのお付き合いが終わり家に帰宅したときに紅会長からメールが届きその内容は目を疑う者だった遥ちゃんが何者かに誘拐されたと聞き冷汗をかいた。聞くところによるとエルフ・・・ファンタジー等によく出てくる耳が普通の人より長いとか魔力が高いがあまり戦い好きではないとかそんな予想をしていたがそれはファンタジーの世界の中であって実物はかなり違うそうだ。本当は自分も行きたくて紅会長に志願したがお前には仕事があるとこの山のような書類任されてしまった。
……因みについ先程上半身が火だるまの大兎が飛び出したときはあまりの出来事に殴り飛ばしてしまった……大丈夫かな？

大兎
「あ～き～ら～（怒）」

バタン！突如生徒会室の扉が乱暴に開けられそこから入ってきたのは青筋立てた大兎さんだった

昭
「すっ、すいません！」

大兎さんを見た瞬間僕は脊髄反射で綺麗に９０度腰を謝った……この間凡そ０．５秒これも並外れた身体能力だから出来る技である

大兎
「もう少しで七回死ぬところだったんだぞ～～（怒）」

昭
「あうあうあう〜〜すいません〜〜〜」
頭を押さえられそこに拳をグリグリされる痛い……
大兎
「たっく……」
と、溜め息をはくとパイプ椅子に座り込む大兎さん何か考えことがあるみたいだ
……ふと生徒会室の白い壁に空いている、奇妙な穴を見つめる。その穴の向こう側には、青々とした草原が広がっていた

この宮坂高校は《聖地》と呼ばれる土地の上に建てられている。
《聖地》とはありとあらゆる未知の世界、次元、場所へと、《道程》を繋ぐことができるかなり特殊な場所……
しかしその力は何故か十八歳以下の子供だけだったので、子供にこの力を管理しようとする動きにより十八歳以下の学校の子供そして特殊な子供を使いこの《聖地》を管理する……これが今の生徒会の設立された理由であるらしい
大兎
「ま、知らぬが仏っていうしねぇ」
突然大兎さんは呟いたその言葉からどこか疲労が感じられた
昭

「どうしたんですか？」

大兎
「いや……何でもねぇよ……もう一戦、いこうかね」

昭
「お気をつけて」

大兎
「あぁ……早く遥を見つめないとな」

昭
「ごめん……」

何時にも増して真剣な目付きけど僕は何も手伝うことさえも出来ない……

大兎
「いきなりどうしたんだ？」

昭
「僕は何も出来ない……」

そう、僕は……

大兎
「そんなことはないと思うな」

昭
「えっ？」

大兎
「昭だって遥を救いたいんだろ？」

昭
「うん……」

右も左も分からないときに大兎さんと一緒にいろいろなことを教えてくれた大切な人だから……

大兎
「上手く言えねけど……その“思い”があれば十分だと思う……俺には俺の仕事、昭には昭の仕事があるんだ。任せろ……遥は絶対に助ける」

昭
「……大兎さん」

大兎
「あぁ……そのなんだ遥が見つかったらまた三人で一緒に何処かに行こうぜ」

昭
「……はい！」

自分の憧れる義兄の背中を見ながら昭は満遍な笑顔で大兎を見送った

第十一章：貴方の後ろに貴方の傍に（前書き）

燐

「どうも作者の燐です。今回も今回として中々の駄文ですがなんとか２０００文以上書けました。
相変わらずの駄文ですが良ければ見てください出来れば……出来れば！　感想を下さい！！！」

第十一章：貴方の後ろに貴方の傍に

空
「あなたは今何処で何をしていますか？」

次元と空間のまた先にある世界全ての世界の“原典”と呼ばれる世界“元界”その一角に美しいと一言では説明出来ないほどの色々取り取りの花畑がありそこには一つ一つその存在を明かすように花が咲き誇っていた……

空
「この空の続く場所にいますか？」

その花畑の中に一人の影があったその影は世界神の三柱の次元・創造・破壊、の中で破壊を司る神……夜天　空だった

空
「今まで私の心を埋めていたもの
失って初めて気づいた
こんなにも私を支えてくれていたこと」

空は従物であるイクス・ティム・アリアの四人を連れてこの場所に来ていた

空
「こんなにも笑顔をくれていた事
失ってしまった代償は
とてつもなく大きすぎて」

美しいを越しまさに幻想的な花畑の中に空はクルクルと回っていた

空
「取り戻そうと必死に
手を伸ばしてもがくけれど
まるで風のようにすり抜けて
届きそうで届かない」

空は歌っていた幻想的な花畑の中で只一人孤独に何かが抜けたように

空
「孤独と絶望に胸を締め付けられ
心が壊れそうになるけれど
思い出に残る貴方の笑顔が
私をいつも励ましてくれる」

空の従者にはそれが酷く心に響いた自分達は気ずいたのだ主(マスター)を心の支えを求めている……けど……それは自分達には求められてないと

空
「もう一度
あの頃に戻ろう
今度はきっと大丈夫
いつも傍で笑っていよう
あなたのすぐ傍で」

空は昭の記憶を消した張本人だ自分達には知っているあの時自分達には何も出来なかった空は記憶を消すとゆう決断を下した……だがその決断を下した時の主は酷く酷く弱々しく痛々しかった。

空
「貴方は今何処で何をしていますか？
この空の続く場所にいますか？
いつもの様に笑顔でいてくれますか？」

空の目には光は灯ってない……それは一部心が壊れたからだ彼はーーーーの記憶した直後にーーーーが手にした対の力を求め始めた。
今の力ではーーーーの近くにいれないと判断し完全不可能と言われたその力を手に入れた……しかしその代償として昔の元気な男口の彼は居なくなった……何処か影がある悲しい思いを持つ別人へと変貌してしまった

空
「今はただそれを願い続ける
貴方は今何処で何をしていますか？」

ティム
「（あいつ……！）」

ティムは人知らず拳を握ったイクス・アリアも心の中では怒っている。だけどそれを絶対に表に出さない何故ならどんなに変わろうとしても目の前にいるのは夜天　空自分の主だそしてーーーーは主の親友だ彼に何らかのことをすればきっと……いや必ず主は傷つくだろう元から自分のことは自分だけで自分のことを解決する溜めがちな主は従者……悪く言えば道具を一切使わなかった。
相談や命令等、もう何千年になるのだろうか主の従者になって未だに一度もされたことがない

空
「この空の続く場所にいますか？　」

そこで空の歌は終わり空は糸が切れた人形のように倒れ込んだ

イクス
「！？　空様！」

イクスは直ぐ様空に走り空が地面に倒れ込む直前に支えた

空
「……？」

光無きハイライトな目でまじまじと空はイクスを見る

イクス
「くっ……！」

何も出来ない自分に異常に腹が立った。
この目も自分達に向けては向いてない向いているのは空だ
蒼天の青空穢れない雲一つ無い青空だった
そして真に空の目はどこか空の青空のまた先の向こう……とある世界で暢気に何も知らず何もかも忘れられ学園生活を送っている奴に……

アリア
「……ティムどこに行くつもり？」

ティム
「……」

ティムはそんな主を見て遂に何処かへ歩き出したが……自分と同期

に主の従者のアリアに呼ばれ止まった

アリア
「……あなたもしかしたら」

ティム
「……お前の考えているとおりだと思うぜ」

ーーーーを鉄　昭を殺る

アリア
「……辞めなさい。空様を悲しませる気？」

彼女の眼光が極限まで鋭くなるだがティムは鉄おも切断するような眼光を直視しても反応は無い逆にアリアを睨み返した

アリア
「……」

ティム
「アリアだって分かるだろ？。あの頃の空はもう居ねぇ……今居るのは……別人だ」

アリアは黙る。
分かってる分かってるけど……反論できない。何故ならティムが自分が行っていく自信があったからだ

ティム
「もうあの頃の空に戻れねぇ……戻らないとことも分かってる……けど彼奴がいるだけで空が一生、あぁなるなら……」

ティムはそこで息を飲んだ。
そして今までにない真剣な表情でアリアに言った

ティム
「ーーーー殺す」

破壊神の従者として
夜天　空の従者として
あとえ相手が主の親友だとしても……魂が抜けたようなあんな主を
見るならば……その原因を潰す粉砕する。
轟覇龍皇『アカムトルマ』の名に賭けて

その言葉と同時にティムはこの世界から飛び立った……

アリア
「……貴方が間違っている何て言えないけど……けど……」

アリアはティムが旅立った場所を見つめながら静かに目を瞑り己の
無力さを憎んだ

▽

その頃……

昭
「……」
昭は空を見つめていた誰かが歌っているような気がしたからどんな歌からは分からないけどそれはとても悲しそうな声だった

昭
「……あれ？」
自分の頬に何かが流れたような気がした触れてみると湿っていた。

昭
「僕は……泣いている？」
分からないなぜ涙が流れるのかなぜ涙が止まらないなぜ涙が溢れてくるのか……なぜこんなに悲しそうなのか

昭
「……辛いのか？僕は」
ふと……頭の中に映像が流れたそれは……金髪銀眼の顔は誰か分からないが僕とそっくりな“誰かが”お互い一緒に同じテーブルに座り紅茶を飲みながら楽しそうに雑談をしていた

昭
「……俺は何をしているんだろうか」
分からない何もかもが分からない
だから知りたいあの人達はだれなのか自分との関係は……結局溢れ出した涙は大兎さん達が帰ってくるまで止まらなかった

第十一章：貴方の後ろに貴方の傍に（後書き）

作者
「中々の新展開？でしたね」

大兎
「アイツらは昭の知り合いなのか？」

作者
「いえいえ正確には記憶を失う前の知りあいです」

大兎
「なんかヤバそうな奴だったように見えるけど……」

作者
「そうですね。ヤバいです殺戮者とまではいきませんがかなり強いです」

大兎
「……作者さん、何かネタバレ連発してない？」

作者
「いいんです。もう何でもいいや～～どうせこの小説半分以上が自己満足なんだから」

大兎
「いやけどさ、……あぁもう兎に角これからはかなり急展開なんだろ？」

作者
「そうですね〜〜後もう少しで殺戮者を全面に出せるしエルフ編が終われば暴走編だし……楽しみで仕方がない！」

大兎
「とりあえずあまり俺を殺さないでくれよ？」

作者
「いや無理」

大兎
「即答だなオイ！」

作者
「いや〜〜〜大兎さんの能力死んでナンボ？みたないな能力じゃん沢山死んでいただないと……」

大兎
「不幸だ〜〜」

作者
「頑張ってください」

大兎
「はぁ〜〜昭の不死能力があればな……」

作者
「あれ正確には不死能力じゃないんですよ？」

大兎

「へ？」

作者
「さてさてこれ以上はネタバレなるのでこれで後書きを終わりにさせてもらいます。最後に一言……感想を下さい～～！」

大兎
「なんか適当に終わらされた……大丈夫なのか？」

とりあえずキャラクター紹介２（前書き）

燐

「どうも作者の燐ともうします。今回はキャラクター紹介これから出るであろティム、アリア、イクスの紹介です」

とりあえずキャラクター紹介2

イクス（本名無し）

年齢：？（億単位）

能力：闇と影を司る力

空の第一の従者
邪神でありその力は凄まじくその辺の神では全く相手に出来ないほどの強大な力を持っている
空に対しては絶対服従で空の為なら自らの命さえ捧げてもいいと考えているほど
普段は無口だがその心は熱くかなり面倒見がいいだがたまに厳しい所もあり仕事から逃げた空を捕まえ強制的にやらせるのはイクスの密かな楽しみ
黒髪金髪のすらりとした体系だが実は真の姿は頭は前に尖った六角形に黄色く光る目があり口はなく両肩から2本ずつ生えている伸縮自在の触手、両腕の鋭利な槍状の手甲、部分的に発光する胴体、背面の四枚の翼状の突起が特徴な姿へと変化する（イメージ：ガメラ3のイリス）

アリア（バイスロスト）

年齢：……死にたいですか？そうですかどんな死に方がお望みですか？

能力：天空を司る力（主に水、風、雷等を操ることが出来る）

空の従者でティムと同じ時に使い魔になった
《天神龍帝》と呼ばれる天空を司る龍でその力は龍の中ではトップクラス本当の名前はバイスロストと言うが空が一々言うのがめんどくさく愛称としてアリアと呼ぶようになった。
本人も結構気に入っている
性格は大人しいが空とイクスと他の世界神以外の人物だと毒舌で容赦無いことを言うことがある
体系はモデルでも目を丸めるほどの美女（美“少”女です！）
此方も人の形は仮の姿で真の姿は蒼白い美しい鱗を持った龍へと変化する（イメージはＭＨＰ３のアマツマガツチ）

ティム（アカムトルマ）

年齢：さぁ？流石に億を越えてから数えてないぜ

能力：大地を司る力（主に炎、土、植物等を操る）

空の従者でアリアと同じ時に使い魔になった
一応、女性だが執事服を着て更に男勝りな性格
性格は熱血で人助けが好きだがたまに前が見えなくなり勝手に暴走することがある
《轟覇龍皇》と呼ばれる大地を司る龍で本名はアカムトルマだが此方も空がめんどくさがり愛称としてティムと呼ぶようになった。
これまた本人も気に入っている
体系は凸凹がなくスラッとして可愛い、綺麗よりどちらかと言えばカッコイイ派（本気で男装すれば中々バレナイほど）
また此方も人の形は仮の姿で真の姿は赤黒く攻撃的な刺状の鱗がある龍へと変化する（イメージはＭＨＰのアカムトルマ）

とりあえずキャラクター紹介２（後書き）

作者
「おはようございます、こんにちは、そしてこんばんは作者の燐です」

イクス
「皆様こんにちは空様の従者であるイクスともうします」

アリア
「皆様こんにちは空様の従者であるアリアと申します」

ティム
「堅いっなイクスさんアリア～。俺はティム読者さんこれを見てくてありがとな！」

アリア
「……ティムあなたいい加減言葉遣いと言う言葉を知ってますか？……あぁ貴方は“バカ”でしたね」

ティム
「何だとアリア！？」

アリア
「ぺっ……貴方が空様から譲れてくださった愛称を言わないでください穢れます」

ティム
「あああぁ？やるかデカキャベツ」

アリア
「いいですよ。煎餅ごときに負ける気はしません」

ティム
「何だと！？」

アリア
「あら？煎餅じゃ分かりませんでしたか？それじゃあ変に曲げずに言いましょう……貧乳」

ティム
「テメェ～～～！！！」

アリア
「フフフ……貧乳と巨乳の圧倒的な違い……素晴らしさを見せてあげましょう！」

ーーーーヘンテコ喧嘩勃発中ーーーー

作者
「イクスさんよアレはほっといていいんですか？」

イクス
「いいですあれがティムとアリアの日常です」

作者
「はぁ……」

イクス
「さて……報告し忘れていましたが前回空様が歌っていたのは癒月様のｙｏｕ　－　Ｖｉｓｉｏｎｅｎ　ｉｍ　Ｓｐｉｅｇｅｌ　－と言う曲ですとてもいい曲なので皆様ご機会があれば聞いてみてください」

作者
「はぁ……とりあえず次回は教会に生徒会メンバーが行くことになってそれに昭は外されたが着いていってしまった……そこで彼が見たのは……とかんな感じに進めたいと思います……はい」

イクス
「頑張ってください」

作者
「はぁ……頑張りたいと思います」

イクス
「では……さようなら」

作者
「あれもう終わるんですか？」

イクス
「私は空様以外にはあまり興味はありません」

作者
「えぇ～～」

ティム

「無駄……（以下エンドレス）」

アリア
「有効有効有効有効有効有効有効有効有効有効有効有効有効有効有効有効有効有効有効……（以下エンドレス）」

イクス
「それでは私は仕事がありますので……」

作者
「マジですか……って居なくなった……誰か助けて〜〜」

アリア
「貧乳はこの世終わりの象徴です！」

ティム
「巨乳は全て……敵だ！」

第十二章：天が紅く染まった零の夜　前編（前書き）

燐

「どうも作者の燐です。いつもいつもで駄文ですが良ければみてください」

第十二章：天が紅く染まった零の夜　前編

ケラケラ
と、道化は笑うこの世の終わりまで
その手を血に染め笑う
口が裂けるほど半月の形を作りながら
狂気をその身に宿し
全てが血に染まるその時まで・・・・・・・

雲が所々ある晴れの空
先生が黒板にチョークで因数分解のことが書かれ消され『ここは重要だぞ～～』と数学の教師、金丸肇（かねまるはじめ）先生が皆に言う

昭
「……う～～ん」

その中で僕の心情を一言で言えば『因数分解？何それ？美味しいの？』……だ……一言じゃなくて三言だったね
この頃、生徒会柄みで少々勉強が衰えてしまいました……ヤバい（汗）

昭
「むむむむ……」

どうしようかなまだ一ヶ月先ぐらいだけど期末テストがあるし今日時間があれば金丸先生に因数分解について聞きにいこうかな……

金丸
「鉄（弟）！……この問題をやってみろ」

昭
「ふへぇ？」

金丸
「“ふへぇ？”て……お前はたまに変な感動詞がでるな……」

昭
「すっ……すいません」

今のやり取りを聞いていた教室の生徒たちがクスクス笑う……酷いよみんな

金丸
「……まぁいいこの問題を解いてみろ」

昭
「はい！」

僕は黒板の前まで移動し問題（敵）を探すえっと……２ｘ＋８ｘ＋１５を因数分解しろ？……えっっっっと～～～～～

……

……

……

…

金丸
「はぁ……鉄お前もこの頃勉強が全面的に疎かだぞ？」

昭
「すいません……」

約三分で撃沈しました。はいやり方すら曖昧だったので

金丸
「生徒会で忙しいのは分かるがもう少し頑張れよ？」

昭
「はっ、はい！」

その後、大兎さんも帰ってきて授業も終わり僕達はクラスの皆に今まで溜まったプリントを貰ったり皆からの応援や協力を聞き不覚にも泣きそうになった

大兎
「昭」

昭
「ん？」

そして休み時間、大兎さんに誘われ一緒に行くことになったのだが

大兎さんは生徒会室に鞄を忘れたっぽく一緒に行くことになった

大兎

「遥の居場所は代々分かったみたいだ。そんでエルフのお偉いさんに会いに行くみたい何だけど月光が《軍》に報告しないといけないみたいで準備にも時間がかかるから数日は普段の生活に戻ってろ……だってさ」

昭

「エルフお偉いさん？もしかして王族とか侯爵とかの？」

大兎

「確か王族って言ってたような気がするな……」

昭

「……」

おかしい……明らかにおかしい遥ちゃんは一般人の筈なのになんで他の世界の王族に会う必要があるんだ？……違う世界がなぜここまで？

そんな思考がグルグルと頭の中を駆け巡り理解できないと頭が答えを出す……そんな時ふと大兎さんを呼ぶ声がした

？？？

「お～大兎～」

大兎

「ってなんでもう呼び捨てなんだよ」

宮坂高校の制服と疑うような短いスカートに、綺麗に脱色した金髪

……碧水華鈴(あおみかりん)さん家の長女、碧水泉(あおみいずみ)さんだ

泉
「げっ……昭」

昭
「泉さんどうしたんですか？」

彼女とは少し知り合いで彼女が煙草とかを吸っているときは容赦無く注意したりする……どんな関係なんだろう？ときかれた僕にもよく分からない

泉
「何であんたが大兎と一緒に？」

昭
「同じ生徒会に用事で」

泉
「……あんたも生徒会メンバーだったのね」

昭
「そうですけど？」

泉
「……大兎あの約束お願いねじゃ…！」

昭
「あっ！　泉さん！」

僕の声を知らんぷりし泉さんは去っていった

大兎
「昭？泉と知り合いなのか？」

昭
「知り合い程度だけど……」

嫌われているのが目に見えているね……そんな嫌われるようなことしたかな……煙草を吸っている時に煙草がどれだけ体に悪いか教えて（無理矢理&しつこく）あげただけなのにな……

昭
「それじゃあ行こう。大兎さん」

大兎
「あぁ……」

そして僕達は生徒会室に入っていった……

▽

生徒会室に戻ると全員が揃っていた

美雷さんはお使い大兎さんは月光さんとヒメアさんに何かとお話があり色々と話し合っていた

……とりあえず僕は自分の席に座り授業で分からなかった因数分解について自習することにした。

大兎

「昭俺ちょっと用が出来たから出ていってくる」

昭

「そうなんですか？」

大兎

「多分夕方頃には帰ってきくるわ」

昭

「えっ？　授業は……」

大兎

「頼むわ！」

と大兎さんとヒメアさんは生徒会室から出ていった

……大丈夫なのかな？
そろそろ予鈴がなるころなので僕も月光さんにお先に失礼しますと
言い残し僕も生徒会室に出た……出た時に電話しながらジェントル
マンみたいな人がいたがあまり気に入りなかった

▽

授業が終わり僕はとりあえず帰宅した

昭
「ん～～」

布団に横になり僕は寝ることにした時間は４時過ぎ……早すぎだが
書類整理のために使った精神的疲労のせいか僕は直ぐに眠りについて

ーーーさて、この頃溜まってきたきたからな……そろそろ発散させてもらおうか

……そんな言葉が自分の口から言われたことに知らず

第十二章：天が紅く染まった零の夜　前編（後書き）

燐

「感想が欲しい」

終わり↑オイッ！

第十二章：天が紅く染める零の夜　中編（前書き）

燐

「どうも作者の燐です。いつも道理の駄文ですが良ければ見てください。この話で遂に昭の正体が分かります……お楽しみに？」

第十二章：天が紅く染める零の夜　中編

その者は孤独でした
その者は破壊者でした
その者は神でした
その者には親友がいました
その者は親友を傷つけました
その者は嘆きました
その者は……これから何をするのでしょうか

大兎
「昭について……？」

月光
「あぁ……」

とある二階建てのごく普通の家
その中で二人の少年が話し合っていた

大兎
「昭の正体が分かったのか！？」

片方は鉄　昭の義兄である鉄　大兎

月光
「……あぁ」

もう一人は宮坂高校の生徒会長、紅　月光

大兎
「教えてくれ月光」

月光
「……」

大兎
「月光？」

珍しいと大兎は思った。自分の知っている紅　月光はこんなにも動揺を隠しきれない人物ではないと

月光
「……大兎、お前は彼奴がどんな存在であっても信じるか？」

大兎
「……は？」

開かれた言葉は余りにも月光に似合わない口調だった

大兎
「……よく分からないんだけど？」

月光
「お前はバカか？……あぁ、お前バカだったか……」

大兎
「何だとゴラァ！？」

月光
「殺るか？挌下？」

大兎
「……いや、いい」

月光
「珍しいなお前なら殴りかかってくるかと思ったが」

大兎
「それより昭のこと……知っていること全部教えてくれないか……俺達はもう彼奴とは会えなくなるかも知れないんだから」
自分達は遥を救出することに決定したが《軍》に反対されこの救出は命懸け……更に学校には戻れないかもしれない知れないからだ
生徒会メンバー……昭を退け全員が行くことが決まっている昭を退けた理由は昭のもう一つの顔、殺戮者（スレイヤー）に釘を打たれているからだ『厄介事には巻き込むなと』っと

大兎
「兎に角、彼奴がどんな奴でも俺とあいつは家族だ……あいつは自分に記憶が無いことに嘆いている」
知っているのだ鉄家は昭はとても記憶が無いことに怯えていることに

自分には本当の家族が居るのか？
自分には友達がいたのか
自分は何故倒れていたのかもしかして捨てられたのか
自分は……何者なのか
と悩んで時には悔やんだりもしていたことを……

大兎
「だから教えてくれ月光。昭のことを……」

月光
「分かった……後悔するなよ？」

そして月光は重く硬く閉ざしていた口を開き語り始めた……かつて“暴食の魔眼”を使い十六の世界を“喰らった”鮮血を浴びながら殺戮を快楽にし狂気を身に宿した“化物”の話を……

▽

月光
「……これが今分かったいる全て、だ」

大兎
「嘘……だろ？」

鉄　昭の本当の名前は元ーーーーそして今は“零崎　紅夜”と言う
何故名前を捨てた……かと言うと単純だ死んだんだーーーーは己の
罪を償うためにそして新たな存在としてまた罪を償うために
その罪とは十六の世界に住んでいた何も罪もない全ての存在……人
も獣もまして信じられないことに“神”さえも“喰らった”のだ
己の手で
己の意思で
己のエゴで
喰らったのだただ一つの衝動によって……“殺戮衝動”によって

月光
「流石の俺も驚いた……あんな奴が人を殺せるような奴じゃないこ
とは分かっていたんだがな……」

大兎
「……」

知ってしまった
知ってしまった
知ってしまった

開いてしまった
開いてしまった
開いてしまった
禁忌の扉を開いてしまったのだ紅　月光と鉄　大兎はその大罪に昭
……いや“鮮血の殺戮者”ーーーーを
“罪遺物”零崎　紅夜を

大兎
「（こんな……ことあいつになんて説明すればいいんだ……！）」
料理が上手くて家事も出来て勉強も出来て性格も良くていつも笑顔で皆の助けになろうと必死で必死で影ながら努力をしている昭を大兎は知っていた

大兎
「（……くそっ！）」

教えられない
あんな優しい奴が“貴方は殺戮者で数えきれない程の人を殺してきました”なんて口が裂けても言えない一番人を傷つけるのが嫌いで誰かの為に役立ちたいと……

月光
「大兎……同情はしないが一先ず帰れ……この事をあいつに話すか話さないかはお前が決めろ」
そんな思考を繰り広げていると月光から言われた……月光はお前が決めろと言っているがその目は“話すな”と訴えているように見えた

大兎
「……分かった」
失意のどん底におとされた大兎の足取りはとても重く悲しそうだった

第十二章：天が紅く染める零の夜　中編（後書き）

燐

「おはようございます。こんにちは。こんばんは。作者の燐です早速ですが次回遂に殺戮者が動きます……いや～～どうやろうと試行錯誤の連続ですが出来ればぜひ良ければ見てください！」

終わり↑（後書きのネタが無い（汗））

第十二章：天が紅く染まった零の夜　後編（前書き）

燐

「どうも作者の燐といいます。いや～～中々上手くいかないものですはい……いつもどおりの駄文ですがよろしくお願いします」

第十二章：天が紅く染まった零の夜　後編

力とは何か？
復讐するため？
何かを守るため？
自由を掴むため？
痛め付けるため？
見下すため？
戦うため？
殺すため？
生きるため？
色々あるが……俺の持つ力は何をするための力なんだろうか？

ゆらりと真っ黒な部屋の中で彼はベッドから降りた
その左目は紅く染まり
その髪は漆黒に染まっていた
その瞳から溢れるのは狂気。ゆらりゆらりと彼は自分の扉を静かに開けた……

月光
「……あいつには言ったか？」

大兎
「……言ってない」

月光
「そうか……それもいいか」

昭を除き生徒会メンバーは今大兎の部屋に集まり今、エルフの世界に行こうとしたていた……

美雷
「ねぇねぇ、ゲッコー不死身君の弟は連れていかないの？」

月光
「あいつは雑用係だ。戦いには向けない」

ヒメア
「大兎……どうしたの？顔色良くないけど」

大兎
「大丈夫だよ。ヒメア……大丈夫」

“十六の世界を喰らった化物”月光から聞かされた昭の過去が未だに頭に残る……そして決めたあいつ（昭）はもう生徒会に居るべきではないと……もうあいつは自分も数日前まで当たり前のように感

じていた“日常”に還すべきだと……

殺戮者
「俺が眠っているうちに色々めんどくさいことになっているそうじゃないか……」

全員
「「「「「！？」」」」」

いつの間にか右目が蒼左目が紅、髪は漆黒の昭のもう一つの顔である殺戮者（スレイヤー）が壁にもたれ掛かっていた

ヒメア
「いつの間に入ってきたの？」

殺戮者
「普通にドアを開いて入ってきた」

殺戮者が親指を扉に向ける。確かに扉は空いていた全開で

月光
「お前は……“何でここにいる”」

大兎
「そうだ……俺を昭を巻き込んでないぞ！」

殺戮者
「あぁ～～まぁ確かにな確かに俺はこいつに厄介事に巻き込むなとか言ったかが……正確には違う」

月光
「……何？」

殺戮者
「俺に化せられた任務は……こいつの“日常を守る”ことだ」

月光
「……どういうことだ」

殺戮者
「はぁ……ようはお前や鉄　大兎に死んでもらっては困るとゆう訳で……尺だが協力する。時雨　遥の救出をな…」

美雷
「おぉ…！助っ人とゆう奴か？」

殺戮者
「そう思って構わねぇよ」

大兎
「……協力してくれるのか？」

殺戮者
「あぁ……そうだな自称天才、お前ならそろそろ俺等の正体に気づいているだろ？」

月光
「鮮血の殺戮者と罪遺物……だろ？」

ヒメア

「“鮮血の殺戮者”！？　こいつが！？」

大兎
「ヒメア、知っているのか？」

ヒメア
「えぇ……だから天魔を殺せたわけね……」

殺戮者
「天魔……あぁ、あの天使擬きか……だが違うな確かに今でも天魔を殺せるがあいつが天魔を葬ったのはまた違うものだ」

大兎
「…あの銃剣か？」

鮮明に覚えている
あの禍々しい銃の形ながら剣と呼べるあの漆黒に光る武器を

殺戮者
「へ～～あれを見たか……まぁ詳しい話は後回しだもう二つの名を知られているならもう偽名は必要ないか……俺の名前は天紅（あまくれない）零夜（れいや）だ……初めまして人間二名、吸血鬼、悪魔……さんよ」

狂気を宿した紅く煌めく瞳は四人の心を震えさせた

第十二章：天が紅く染まった零の夜　後編（後書き）

燐

「次回やっと戦闘？です難しいですね……本当に……アハハハハハハハハ……」←色々と壊れ始めた作者

終わり

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4700p/

いつか神司の殺戮者

2011年11月13日02時20分発行